

国際交流
センター・
国際部

2018年度 成果報告書

目次

I. グローバルパートナーシップ形成

海外訪問

1. 学長・教職員の協定校等訪問 3
2. 日本留学フェア 5

海外からのご訪問

1. 海外の大学からのご訪問 6
2. その他の海外機関等からのご訪問 11

OB ネットワーク整備 14

II. 学生交流

海外派遣

1. 交換留学 16
2. 海外研修プログラム 18
3. 海外留学の事前指導およびフォローアップ 22

海外からの受入れ

1. 日本語・日本文化短期プログラム 32
2. 学生訪問団の受入れ 36
3. 国際ワークショップ 37

留学生サポート事業

1. 日本語研修コース 39
2. 日本語補講 44
3. 日本語・日本事情教育 48
4. 留学生支援・相談・文化交流 53
5. その他留学生支援のための行事等 58

III. 国際化教育

G-フィロス

1. 交流イベント 61
2. Student Assistants (SA)の活動 62
3. 英語学習・留学アドバイザーによるサポート 63

医学部キャンパスでの取り組み 65

IV. 地域貢献

留学生の地域との交流 69

小・中・高等学校への留学生派遣 71

V. 国際交流関連データ 72

国際交流センター長挨拶

茅 暁陽 (まお しゃおやん)
国際交流センター長・国際部長

本学の第3期中期目標中期計画では、アジアをはじめとする諸外国から大勢の優秀な留学生が集い、文化や言語、宗教の違いを越えて交流・協働し、国際的な環境のなかで勉学できるようなキャンパス整備を目標に掲げました。より具体的には、協定校との連携の強化やOBネットワークの整備を通じたグローバルパートナーの形成、キャンパス内における国際交流環境の整備、大学院デュアルディグリープログラムの設置や専門に合わせた海外インターンシップの実施等の教育プログラムの国際化等の施策を同計画に盛り込み、期間中の海外からの留学生受入れ数と本学学生の海外派遣数を、対第2期最終年度比で各々20%増加させる数値目標が設定されています。

本報告書では、この第3期中期目標中期計画の目標達成に向けて、国際交流センター教員と国際部スタッフが丸となって取り組んできた活動内容を、グローバルパートナーシップ形成、留学生支援、学生海外派遣、キャンパス国際化、地域貢献の5つのパートに分けて紹介しています。

平成30年度の活動で特筆すべきことは、平成28年度に工学専攻土木環境コースと中国西南交通大学運輸と物流学院との間に修士デュアルディグリープログラムを設置したことに続き、新たに工学専攻コンピュータ理工コースと中国杭州電子科技大学（HDU）計算機学院の間にも修士デュアルディグリープログラムが開始されたことです。定員20名の学生たちは、計2.5年間の修学期間中、1年目と最後の半年はHDU、2年目は本学で講義の履修と研究指導を受けます。企業と連携し応用研究に長けているHDUの教員と、主として基礎研究を志向する本学の教員との間で専門を共有する者同士がペアを組み、共同で学生指導に当たることにより、AI分野における国際的な産学連携研究ネットワークを形成し、融合された最新研究成果を教育の現場へと環流するとともに新たな展開をも目指しています。実際平成30年度には、本学から計9名の教員がHDUに出向いて講義を実施すると同時に、HDUの教員と研究交流を行いました。HDUとは平成25年度より国際交流センター・国際企画課が中心となって、100名以上の学生の相互派遣を行ってきました。語学や文化交流のみでなく、研究室訪問や共同ワークショップ開催、さらに平成30年度には情報工学を専攻する両大学の学生による親善プログラミングコンペティションも開催してきました。こうした一連の地道な国際交流活動が大学院レベルの専門教育の国際化に結実したことは、大学本来の国際化の在り方であると思います。

こうした取り組みを継続的に実施してこられたのも、学長及び国際交流担当理事の強力なリーダーシップのもと、国際交流センターの専任・協力教員と国際部国際企画課職員の全員がタッグを組んで献身的に対応してくださったこと、ならびに各学域や附属施設の多くの教職員の皆様から絶大なるご理解・ご支援をいただいていたお陰です。この場をお借りして改めて心より御礼申し上げます。次第です。

I. グローバルパートナーシップ形成

本学の特色ある様々な研究分野を通して、新たな海外大学との交流が広がりつつあります。国際交流センター・国際部では、新たな交流締結や海外からの訪問者受け入れを通して、山梨大学の更なるグローバル化に向けて、グローバルパートナーシップの形成を推進しています。

海外訪問

1. 学長・教職員の協定校等訪問

海外の交流協定校や、新たな協定締結の可能性があるその他の教育機関等を、学長、国際交流センター長および関係する教職員が訪問し、グローバルパートナーシップの強化・拡大に努めています。平成 30 年度の海外訪問について、以下にご報告します。

(1) スロベニア・リュブリャナ大学と学生交流協定を締結：平成 30 年 6 月 20 日（水）

島田眞路学長、岩崎甫国際交流担当副学長、茅暁陽国際交流センター長らがスロベニア共和国・リュブリャナ大学を訪問し、同大と本学の学生交流協定締結の調印式を挙行了しました。

同大とは平成 29 年 9 月に包括的な大学間交流協定を締結しており、医学部や生命環境学部を中心に教育研究の交流を推進しています。

調印式にはイゴール・パピッチ同大学長やタンジャ・ドミトロヴィッチ副学長らが出席されました。また式の後には、同大生物学部や教養学部の教員らを交えて意見交換会が行われ、今後の更なる学生交流事業の推進を確認しました。

その後、島田学長らはパピッチ学長ら同大役員と共に、在スロベニア日本国大使公邸を訪問し、福田啓二特命全権大使と両国間の産学官連携強化について意見交換を行いました。



調印式の様子

左：パピッチ学長 右：島田学長



意見交換会



在スロベニア日本国大使公邸にて

左から 3 番目：福田大使

(2) 中国・杭州電子科技大学との修士課程デュアルディグリープログラム開講式挙行：平成 30 年 9 月 17 日（月）

中国・杭州電子科技大学にて、本学と同大の修士課程デュアルディグリープログラムの開講式を挙行し、島田眞路本学学長、王兴杰同大共産党委員会書記長の他、両大学のプログラム指導教員や参加学生らが出席しました。

同大とは、平成 20 年 12 月に大学間交流協定を締結しており、これまで 150 名以上の学生が相互訪問を行うなど、様々な交流が実施されています。

本プログラムは、海外大学との間で設定された単位互換制度を利用し、それぞれの学習プログラムを修了することにより、双方の大学の学位が取得できる制度です。この度、本学大学院修士課程工学専攻コンピュータ理工学コース及び同大計算機学院との間で同プログラムを開講し、参加学生は、双方の大学の教員から指導を受けながら、本学で 1 年、同大で 1 年半勉強と研究を進め、両大学での修士学位の取得を目指します。

開講式では、島田学長及び王書記長が祝辞を述べ、両大学間の交流のさらなる発展に期待を寄せた他、プログラム参加学生が勉学に励む決意を述べました。また、開講式に伴い、同大キャンパス内にて記念植樹が行われ、記念碑が建立されました。

式典終了後、島田学長は同大の Brain Machine Interface 研究室を視察し、本プログラムに参加する学生や教員と意見交換を行いました。



開講式の様子



祝辞を述べる島田学長



王書記長(左)と島田学長(右)による
記念植樹



記念碑を建立



Brain Machine Interface 研究室の視察



両大学の教員による意見交換会

(3) ミャンマー教育省評価・監督局と交流協定を締結：平成 31 年 2 月 16 日（土）

島田眞路学長及び茅暁陽国際交流センター長らがミャンマー国・ネピドーを訪問し、ミャンマー教育省評価・監督局 Nyunt Phay 局長、Aung Swe Htun 同副局長らと交流協定締結の調印式を挙りました。

Phay 局長は、本学と大学間交流協定を締結している同国パテイン大学の学長を兼務しており、同大とは主に生命環境学域が共同研究・学生交流等を連携して行っています。今回の協定締結により、ミャンマーの全国立大学や研究機関と円滑に連携し、教員交流・共同研究推進・グローバル人材育成等が行われます。

この他、島田学長らは Phay 局長と今後の国際交流について意見交換した他、山村英樹生命環境学域准教授が本学・パテイン大学・(独)製品評価技術基盤機構 NITE の共同事業の報告会で研究成果を報告しました。

また一行は、同国唯一の農学単科大学であるイエジン農業大学を視察し、同大幹部及び同大を支援する(独)国際協力機構(JICA)メンバーと意見交換しました。



調印式：島田学長(左)と Phay 局長(右)



調印式：ミャンマー教育省幹部らと



ミャンマー教育省・NITE と共同事業報告会



イエジン農業大学を視察



JICA との意見交換

2. 日本留学フェア（タイ）：平成 30 年 8 月 26 日（日）～30 日（木）

国際交流センター・国際部では、独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）が実施する「日本留学フェア」に毎年参加して、日本の大学への進学を希望する海外の学生たちに山梨大学の PR を行っています。フェアは日本国内と海外各国で行われており、日本国内では東京で開催されるフェアに毎年参加している他、海外では平成 30 年度は、タイ会場に参加しました。以下に、参加について報告します。

茅国際交流センター長、横森国際交流企画課職員及びタイ出身の本学博士課程在籍の学生 1 名が現地へ赴いて山梨大学のブースを設け、会場を訪れたタイの学生に本学の特色等を説明し、本学を PR する良い機会となりました。

また、翌 27 日と 28 日にはコンケン大学を、29 日と 30 日はプリンス・オブ・ソクラー大学を訪問しました。

コンケン大学では副学長を表敬訪問するとともに、工学部と技術学部を訪問しました。また、本学からの交換留学生在が所属する研究室を訪ね、本学学生を激励し、指導教員と今後の交流について意見交換も行いました。

プリンス・オブ・ソクラー大学では、副学長を表敬訪問するとともに、生物博物館の見学、管理科学部および理学部を訪問しました。また、管理科学部が支援する Panom Wang 県の村を訪問して、その活動を視察しました。この村では有機農業で赤米、茶色米等を栽培しており、管理学部ではそのブランディング活動の支援を行っています。視察では地域支援に関する共同 PBL プロジェクトの立ち上げの可能性について意見交換を行いました。



タイ留学フェア（バンコク）



コンケン大学
副学長表敬訪問



コンケン大学
本学交換留学生の研究室



プリンス・オブ・ソクラー大学
生物博物館



プリンス・オブ・ソクラー大学
管理科学部



プリンス・オブ・ソクラー大学
理学部



プリンス・オブ・ソクラー大学
副学長表敬訪問



パノムワン村訪問

海外からのご訪問

1. 海外の大学からのご訪問

海外の交流協定校や、協定締結を視野に交流している大学からの、山梨大学への訪問についてご報告します。交流協定校からは、学生交流のプログラム担当教職員が本学を訪れ、さらなるプロモーションに向けた打ち合わせや本学学生へのプログラム説明会などが行われました。また、協定校以外にも本学の特色ある研究に興味を持つ海外の教育機関は多く、今後の協定締結に向けての訪問等がありました。

(1) アメリカ・モーニングサイド大学と本学合唱団がジョイントコンサートを開催：平成30年5月23日(水)

アメリカ・モーニングサイド大学の Reynders John 学長及び学生らが来学されました。

同大があるアイオワ州スーシティ市は山梨市と姉妹都市を締結しており、今回、同大学生が研修訪問の一環として山梨県を訪れ、本学学生と交流を行うこととなりました。

Reynders 学長らご一行は島田眞路学長を表敬訪問し、研修訪問の経緯や今後の交流について意見交換を行いました。また、同大教員と学生らは2班に分かれて、教育学域 片野耕喜教授及びグロマー・ジェラルド教授の「日本の芸術～歴史と特徴」、生命環境学域 御園生拓教授及び片岡良太助教の「環境科学分野における持続可能な農業への挑戦」と題した講義を受けました。



Reynders 学長（右）と島田学長



御園生教授（中央奥）による講義



片野教授（中央奥）による講義

その後、場所を山梨県笛吹川フルーツ公園（山梨市）に移し、両大学によるジョイントコンサート（主催：山梨市）を開催しました。同大合唱団及び本学合唱団がそれぞれの国を代表する曲を披露し、最後は「カントリー・ロード」を合同で合唱しました。

国境を越えたコーラスに観客は熱心に聴き入り、両大学学生が織り成すハーモニーに浸る初夏の一夜となりました。

なお、コンサート前にはウエルカム・パーティーが催され、両大学教員及び学生の交流が深まりました。



高木晴雄山梨市長（右）による主催者挨拶



本学国際交流センター長 茅教授



同大合唱団による合唱



本学合唱団による合唱



両大学学生と一緒に合唱



ウエルカム・パーティーの様子

(2) スロベニア・リュブリャナ大学の学生らが工学部のロボット研究を視察：平成30年7月9日（月）

スロベニア・リュブリャナ大学のマルコ・ミュニ教授、ミラン・スケンデル元スロベニア駐日本大使、ルイ・コタリー元スロベニア大使館経済秘書及びリュブリャナ大学の大学院生18名が来学しました。

同大とは平成29年9月に大学間交流協定を、平成30年6月に学生交流協定をそれぞれ締結しており、今回はロボット研究に関する交流促進を目的に訪問されました。

当日は、熊田伸弘工学域長による歓迎挨拶の後、工学部情報メカトロニクス工学科の教員・学生の案内で、「モモシクイガ検出ロボット」、「音声制御型マニピュレーションロボット」、「SCARA（水平多関節ロボット）試作機」などについて研究視察を行った他、歩行アシストロボットの装着体験が行われました。同大の学生は興味深そうに本学のロボット研究を視察し、多くの質問が上がるなど有意義な視察となりました。

その後、島田眞路学長主催の交流会を開催し、研究内容や学生生活について、両大学の学生同士で活発な意見交換が行われました。



モモシクイガ検出ロボットの視察



音声制御型マニピュレーション
ロボットの視察



SCARA(水平多関節ロボット)試作機の視察



歩行アシストロボットの装着体験



交流会で挨拶する島田学長



交流会での記念撮影

(3) マレーシア・ペルリス大学とのセミナー及び短期共同研究：平成30年7月22日（日）～8月11日（土）

国立研究開発法人科学技術振興機構「日本・アジア青少年サイエンス交流事業（さくらサイエンスプラン）」（本学担当：西崎博光工学部准教授）の一環として、マレーシア・ペルリス大学の大学院生11名及び教員4名が来学され、セミナー・技術交流・共同研究を実施しました。

本事業は、産学官の緊密な連携により、優秀なアジア地域の青少年が日本を短期に訪問し、未来を担う、アジア地域と日本の青少年が科学技術の分野で交流を深めることを目指すもので、アジア地域の青少年の日

本の最先端の科学技術への関心を高め、日本の大学・研究機関や企業が必要とする海外からの優秀な人材の育成を進め、もってアジア地域と日本の科学技術の発展に貢献することを目的としています。

今回、本学では、教員らがディープラーニング・画像処理・拡張現実感等の人工知能に関するセミナーを開講し、同大からは教員・大学院生による IoT (Internet-of-Things) ・センサーに関するセミナー及び実習を開催することで、両大間の技術交流を実施しました。

また、「人工知能関連技術を用いた Internet-of-Things デバイスから取得したセンシングビッグデータの分析・可視化に関する研究」というテーマのもとに、同大学院生らが本学工学部情報メカトロニクス工学科（担当：西崎准教授）及びコンピュータ理工学科（担当：茅暁陽工学部教授・豊浦正広大学教育センター准教授）の各研究室に滞在し、共同研究を実施しました。

プログラムの最終日には成果報告会を実施しました。約 3 週間の短い滞在でしたが、同大学院生が熱心に研究に取り組み、多くの研究成果を得ることができました。今後の両大間の共同研究の発展につながっていくものと期待されます。



ディープラーニングセミナー



IoT・センサーセミナー



共同研究に関するディスカッション



成果報告会



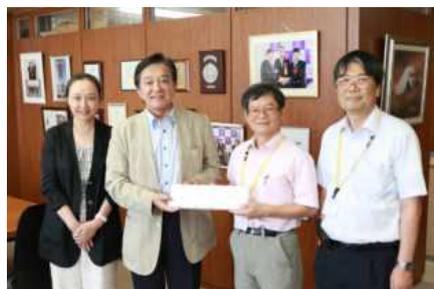
同大学生らと集合写真

(4) 国立台湾科技大学のホァン・ビンジャオ持続可能エネルギー開発センター長が来学：平成 30 年 8 月 22 日 (水)

国立台湾科技大学のホァン・ビンジャオ 持続可能エネルギー開発センター長が来学されました。

同大とは、平成 30 年 2 月に国際交流協定を締結しており、本学クリーンエネルギー研究センターを中心に、教育研究の連携を推進しています。

燃料電池やリチウムイオン電池などエネルギー変換・貯蔵分野がご専門のホァンセンター長は、武田正之本学理事・副学長、内田裕之同センター長、茅 暁陽国際交流センター長と意見交換を行い、今後の更なる交流の強化を確認しました。



左から茅センター長、武田理事、ホァンセンター長、内田センター長

(5) タイ・プリンス・オブ・ソンクラ大学と大学間交流協定締結：平成 30 年 11 月 26 日（月）～27 日（火）

タイ・プリンス・オブ・ソンクラ大学のニワット・ケワプラドゥップ学長らご一行が来学し、同大と本学との大学間交流協定の調印式を挙りました。

ご一行は調印式に先立ち、島田眞路学長や茅暁陽国際交流センター長、共同研究を実施する本学教員らと、今後の学生・研究者交流や共同研究等の推進について意見交換しました。

また、ご一行は大村智記念学術館・発生工学研究センターをそれぞれ視察し、ノーベル賞を受賞した本学卒業生・大村智特別栄誉博士の足跡と本学が誇る最先端研究に触れたほか、医学部附属病院にて武田正之病院長を表敬訪問し、最新の医療システムを視察されました。

なお、同大は本年 7 月に本協定に係る打合せのため、本学を訪問されております。



締結書を掲げる島田学長(左)と
ニワット学長(右)



意見交換の様子



大村智記念学術館を見学



発生工学研究センターを視察

説明する若山照彦同センター長(右)



武田病院長(手前左)を表敬訪問



附属病院の最新医療システムを視察

(6) 中国・南開大学との研究交流会を開催：平成 30 年 12 月 8 日（土）～10 日（月）

科学技術振興機構「日本・アジア青少年サイエンス交流事業（さくらサイエンスプラン）」（本学担当：李吉屹工学部助教）の一環として、中国の国立大学である南開大学の大学院生 10 名・教員 1 名が来学されました。

本事業は、アジアを中心とする地域から学生・若手研究者を招き、最先端の技術を紹介するとともに、日本の学生との交流を図ることで、日本を含むアジア地域における国際的な科学技術人材の育成を進めることを目的としたものです。

今回は、同大計算機学部・人工知能学部と本学工学部コンピュータ理工学科との間で研究交流会が行われ、同大の張瀚人工知能学部教授及び本学の大淵竜太郎教授・古屋貴彦助教がそれぞれ基調講演しました。

その後、学生らは、コンピュータサイエンスや人工知能について活発な議論を展開した他、「異分野領域における共同研究」をテーマにグループワークを実施し、研究発表などを通じて将来的に共同研究に発展可能なアイデアを共有しました。

3 日間の交流を通じ、学生らは学術交流だけでなく、互いの国・大学について理解を深めるなど、有意義な交流会となりました。



張瀚教授による講演



グループワークで議論する学生



学生による研究発表



両大学の学生・教員による集合写真

(7) フランス・モンペリエ農業科学高等教育国際センター及びボルドー大学の学生らが来学：平成 31 年 2 月 27 日 (水) ～28 日 (木)

フランス・モンペリエ農業科学高等教育国際センター (SupAgro) 及びボルドー大学の学生・教員など 20 名が来学しました。

本学は 2016 年 3 月、世界 22 ヶ国・55 機関で構成されるブドウ・ワイン研究の国際ネットワーク「Oenoviti International Network」と連携を結んでおり、今回は、加盟する両機関の学生らが、日本のワイン生産の視察を兼ねて来学しました。

27 日 (水)、一行は山梨県内のワイナリーを見学後、本学ワイン科学研究センターを視察し、本学学生との懇親会ではワインに関する活発な意見交換が行われました。

28 日 (木) は、甲府キャンパスにおいて、「国際ブドウ・ワインセミナー」を開催し、ブドウ栽培が専門であるアラン・デロワール SupAgro 教授及びローレンス・ジニー・デニス ボルドー大教授より、ブドウの生育と収穫期の決定について、世界最先端の研究をご教示いただきました。セミナーには、学生・教職員・全国のブドウ栽培やワイン醸造関係者等約 180 名が参加しました。



奥田徹ワイン科学研究センター長が施設内を案内



親睦を深める学生たち



ワインについて語り合いました



講演するデロワール教授



講演するデニス教授



熱心に聴き入る参加者



島田眞路学長もセミナーを聴講

2. その他の海外機関等からのご訪問

継続的な交流のある教育機関以外にも、海外の様々な機関から山梨大学への訪問がありました。これら訪問のうち、国際交流センター・国際部に関わったいくつかの訪問について、以下にご報告します。

(1) パラノビチ・ノルバート ハンガリー特命全権大使が来学：平成 30 年 4 月 20 日（金）

パラノビチ・ノルバート ハンガリー特命全権大使らご一行が、本学甲府キャンパスを訪問されました。

山梨の歴史・文化への理解を深めるために今回山梨県を訪れたパラノビチ大使は、本学の特色ある教育・研究や地方国立大学の現状等を視察する目的で来学されました。

パラノビチ大使は島田眞路学長を表敬訪問し、両国の高等教育機関等における教育・研究や経営等について意見交換し、今後も交流を深めていくことを確認しました。

その後、ワイン科学研究センターを視察した他、附属図書館でノーベル医学・生理学賞を受賞した本学卒業生・大村智博士の記念展示を見学されました。

パラノビチ大使は、各視察先でハンガリーでの状況を交えながら熱心に質問するなど、有意義な訪問となりました。



島田学長(左)とパラノビチ大使(右)



奥田徹センター長(左)より研究の説明を受けるパラノビチ大使



記念展で大村博士に関する資料を手に取るパラノビチ大使

(2) アルゼンチン特命全権大使及びコスタリカ特命全権大使が来学：平成 30 年 5 月 31 日（木）

アラン・クラウディオ・ベロー アルゼンチン特命全権大使及びラウラ・マリア・エスキベル・モラ コスタリカ特命全権大使が来学されました。

山梨の歴史・文化への理解を深めるために今回山梨県を訪れた両大使は、本学の特色ある教育・研究や地

方国立大学の現状等を視察する目的で来学されました。

両大使は本学役員らを表敬訪問し、各国での高等教育・研究や大学経営等について意見交換し、学生交流や共同研究など今後も国際交流を深めていくことを確認しました。

その後、両大使は燃料電池ナノ材料研究センターを訪れ、本学が誇る世界トップレベルの研究に触れられました。



本学役員らとの記念撮影
ペロー大使(中央左)とモラ大使(中央右)



両大使に説明する飯山明裕 同センター長(左) 及び
内田裕之 クリーンエネルギー研究センター長(右)

(3) Honorable Datuk Seri Borhan Dolah マレーシア人事院総裁ご一行が来学：平成 30 年 10 月 16 日 (火)

Honorable Datuk Seri Borhan Dolah マレーシア人事院総裁、Honorable Datuk Dr. Roslina bt. Mokhtar 同国人的資源開発局長、Mr. Abdul Ghani bin Selbi 在日マレーシア大使館参事官らが来学されました。

同人事院は、マレーシア政府派遣留学生を管理する組織で、本学が長年にわたり留学生の受け入れを実施していることから、今回、来学されました。

本学からはこれまで 80 名以上の同国政府派遣留学生が卒業し、世界各国で活躍している他、現在も 30 名以上のマレーシア国籍の留学生が在籍しています。

ご一行は島田眞路学長を表敬訪問し、在学生の修学状況や本学とマレーシアの大学との交流等について意見交換した後、燃料電池ナノ材料研究センターを視察し、本学が誇る世界トップレベルの研究に触れました。

また、ご一行は本学に在籍しているマレーシア出身留学生と懇談し、日本とマレーシアの懸け橋として、留学生の今後の活躍に期待を寄せられておりました。



Seri Borhan 総裁(左)と島田学長(右)



飯山明裕燃料電池ナノ材料研究センター長(右奥)
から説明を受けるご一行



燃料電池ナノ材料研究センターを視察



マレーシア出身留学生との懇談

(4) 台湾・台北駐日経済文化代表処の林 世英 教育部長が来学：平成 30 年 10 月 29 日（月）

台湾と日本の交流窓口である台北駐日経済文化代表処の林世英教育部長が来学され、島田眞路学長、武田正之理事・副学長、茅暁陽国際交流センター長と意見交換しました。

意見交換では、同年 2 月に本学が国立台湾科技大学と国際交流協定を締結し、本学クリーンエネルギー研究センターを中心に教育研究の連携を推進していることに触れた他、今後の更なる交流連携の推進について確認しました。



本学役員との記念撮影

林教育部長(中央左)

(5) 日中産学交流推進協議会理事長及び南京市秦淮区委員会書記長らご一行が来学：平成 31 年 1 月 7 日（月）

金小東日中産学交流推進協議会理事長及び林涛南京市秦淮区委員会書記長らご一行が島田眞路学長を表敬訪問されました。

同協議会は日本と中国の科学技術文化交流の発展に寄与し社会に貢献することを目的としており、ご一行は島田学長及び茅暁陽国際交流センター長と意見交換されました。

本学ではこれまでに、中国国内の 10 を超える学術機関と連携協定を結んでおり、意見交換では本学と南京市の諸大学における学生・教員の交流や共同研究の可能性などについて話し合い、今後新たな交流を検討していくことを双方で確認しました。



意見交換の様子

OBネットワーク整備

国際交流センターでは、本学を卒業した留学生とのネットワーク形成に向け、留学生同窓会の整備を進めています。平成 30 年度は、在学中の留学生に留学生同窓会への登録を促したほか、平成 30 年度入学者のうち 44 名が新たに登録しました。

すでに同窓会に登録している卒業生に対しては、山梨大学とのつながりを維持してもらえるよう、大学広報誌である『Vine』電子版や、年末年始の挨拶状を E メールで送信すると同時に、国際交流センターウェブサイトにも、E-mail と同様の内容で卒業生へのメッセージを掲載するなどしています。このような海外在住の本学出身留学生とのネットワークを、本学の広報活動、海外での優秀な留学生の獲得に活用したいと考えています。



同窓生宛グリーティングカード(平成 30 年末送信)

大学広報誌『Vine』電子版 <https://www.yamanashi.ac.jp/about/281>

国際交流センターウェブサイト <https://www.ciee.yamanashi.ac.jp/>

II. 学生交流

さまざまな分野で国際的な視野を持って活躍する人材を育成するため、日本人学生の海外派遣や、各国留学生との交流事業に力を入れています。日本人学生の海外留学や海外インターンシップへの関心は年々高まっており、派遣人数も増加傾向にあります。

また、海外派遣だけでなく、留学生受け入れ数のさらなる増加をめざし、学生訪問団の受け入れや、在籍する留学生のサポート事業にも力を注いでいます。

海外派遣

1. 交換留学

平成30年度の交換留学派遣では、米国のイースタン・ケンタッキー大学に1名、オーストラリアのシドニー工科大学に1名、スロベニアのリュブリャナ大学に1名、タイのコンケン大学に1名、英国のオックスフォード・ブルックス大学に1名の、計5名を派遣しました。期間は大学や選択するコースによって異なり、それぞれ約9～11ヶ月間となっています。交換留学生は、現地大学での語学授業以外に学部授業にも参加することになるため、募集時点において各留学先の大学から要求されるレベルの英語力に達している必要があります。派遣が決まった学生たちは危機管理教育を含めた事前指導のほかに、自主的な英語学習や国際交流センターの英語学習支援等を利用し熱心に英語学習に取り組み、十分な事前準備をして出発しています。交換留学では、山梨大学への通常の授業料は納める必要がありますが、留学先大学への授業料、検定料及び入学料の支払は免除されています。留学先で取得した単位は、各学域等における審査の上、学部学生は60単位、大学院学生は10単位を超えない範囲内で、山梨大学の単位に振り替えることもできます。

交換留学プログラムは、派遣学生たちにとって、各々のコミュニケーション能力の向上や専門分野の理解を深めるだけでなく、異文化に対する知見とグローバルに活躍する人材としての国際的感覚を磨く経験となっています。ここで、米国・イースタン・ケンタッキー大学（EKU）への留学について紹介します。

米国・イースタン・ケンタッキー大学（EKU）派遣：平成30年8月～平成31年5月

EKUに派遣された学生は平成30年8月から平成31年5月までの9か月間のコースで学んでいます。

現地の学生たちと同様の科目を履修・受講することになるため、派遣時点においてある程度の英語力を備えていても、やはり最初のうちは授業についていくことに苦労があるようですが、1つ1つのこととポジティブに向き合い、充実した日々を送っている様子がマンスリーレポートからうかがえます。



日本滞在経験のある現地の方との交流



元ルームメイトの結婚式



ハロウィンパーティー

※マンスリーレポート

交換留学中の学生には、マンスリーレポートの提出を義務付けています。これは、本人の留学生活のふり返りのためでもあり、危機管理上、大学側が留学中の学生の状況を確認するためのものでもあります。レポートの内容によってサポートが必要と感じられる場合には、交換留学の担当教員や国際企画課職員が学生本人や留学先大学職員とコンタクトを取り、問題の解決にあたっています。

(マンスリーレポート実例 (平成30年度イースタン・ケンタッキー派遣学生・平成30年8月分))

EKU 短期留学マンスリーレポート 2018年 8月
<p>今月の到達目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ EKU での新しい環境に慣れる。 ・ 勉強は大変だが、課外活動は誘われたら必ず行く。
<p>目標達成の状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 初めは、授業や生活に対する不安で寝れない日があったり、ルームメイトへの接し方に戸惑うことがあったりし、ストレスを抱えることもあったが、上手く対処できた。
<p>今月一番印象に残っていること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ たくさんの人に誕生日を祝ってもらえたこと。
<p>勉学面</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 特に自分の専門分野においては、理解度にかなり不安が残る。 ・ 一度だけですが、授業で投げかけられた質問に手を挙げて発言できた。 ・ 質問に行っている。
<p>課外面</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 二年前は、寮の外で友達がたくさんできたが、今回は寮の同じフロアの人とたくさん仲良くなれた。色々なところに行けるわけではありませんが、私の英語を理解しようとしてくれて、とても感謝している。 ・ ホストファミリーにも再会し、楽しい時間を過ごすことができた。 ・ もっと、短期のメンバーとも英語で話して仲良くなりたい。
<p>生活面</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 毎日が充実していたり、宿題を上手く処理できていなかったりして、寝不足気味である。 ・ 以前より、食生活に気を配った生活が送れている。
<p>英語力や英語によるコミュニケーション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 日々、会話で言えなかったり、知らなかったりした単語はノートに書いている。 ・ 今は文を考えて、話すことでいっぱい、発音やアクセントなどが下手である。
<p>良かった点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 友達同士冗談を言うことができる。 ・ 日本では起きないようなトラブル(対応が遅い、警報機がよく鳴る等)にもうまく対処している点。 ・ 短期の人とも英語を使いながら、会話できている点。 ・ わからないことをあいまいにしなかった。
<p>反省点、今後への改善点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 時間をもっとうまく使う。遊ぶことで、たくさん会話力をつけるのもいいが勉強にもしっかり時間を使う。
<p>EKU、または山梨大学への要望があればお書きください。</p> <p>勝手ながら、来月の目標を書かせていただきます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 発音やアクセントを意識して話す。 ・ 一度メモした単語などをたくさん会話で実践する。 ・ 時間の管理。

2. 海外研修プログラム

本学のプログラムとして、交換留学のほか、春季・夏季休暇中の短期語学留学と、語学留学に企業や学校、地方自治体でのインターンシップが加わった海外研修を行っています。本学が提供するプログラムのほか、海外の交流協定校が提供する短期プログラムにも本学学生が参加しています。

(1) 夏季海外研修プログラム

平成30年度の夏季研修プログラムは、米国のケンタッキー州に位置するイースタン・ケンタッキー大学及びアイオワ州に位置するグランド・ビュー大学の2つの協定校への派遣となりました。それぞれのプログラムについて以下にご報告します。

① 米国 イースタン・ケンタッキー大学 英語・文化研修+海外インターンシップ

日程：平成30年8月19日（日）～9月22日（土）（日本発着日）

本プログラムは、イースタン・ケンタッキー大学 (EKU) キャンパスにある English Language Center (ELC) における英語研修と、現地日系企業または教育機関におけるインターンシップを行うものです。今年度は、9名の学生を派遣しました。語学研修は4週間となっており、インターンシップは語学研修期間中と研修終了後、合わせて計5日間、教育インターンシップは現地の学校にて行われ、企業インターンシップは現地の日系企業4社にて行われました。参加した学生からは、「授業やイベントに積極的に参加し、英語を使わざるを得ない環境に身を置くことで、全体的な英語力をアップすることができた」、「現地学校にてインターンシップをすることで、自らが受けてきた日本の教育と、米国の教育の違いを深く理解することが出来た。また、米国の教育から学べる事が多くあった」、「日系企業で働くということはどういうことか知ることができた」などの感想が寄せられました。



インターンシップの様子



EKU 学生との交流



語学研修修了式

② 米国 グランド・ビュー大学 英語・文化研修+海外インターンシップ

日程：平成30年8月5日（日）～9月2日（日）（日本発着日）

本プログラムは、山梨大学が交流協定を締結している米国アイオワ州にある Grand View University (グランド・ビュー大学) における英語研修と、現地の企業においてインターンシップに参加するというプログラムです。本プログラムでは、10名の学生を派遣しました。3週間の語学研修では、Intensive English Classes (山梨大学特設クラス) において週20時間の英語レッスンを受講し、午後はデモイン市周辺へのショート・ツアー等を通して、学んだ英語を実際に使いながら、アメリカ文化を体験することができます。最終週のインターンシップでは、それぞれの専門に合った現地の企業・機関にて業務内容を身近で見学や体験することができ、とても貴重な経験を得ることができます。参加した学生からは、「英語へのモチベーションのみならず、専門に合った企業・機関にて業務内容を身近で見学や体験することにより、自分の専門分野に関してのさらなる学習意欲が向上した」との感想が寄せられました。



グランド・ビュー大学での
オリエンテーション



現地学生との交流



インターンシップ先での成果発表

(2) 春季海外研修プログラム

春季海外研修プログラムは、米国のノーザン・アイオワ大学、英国のレスター大学、中国の杭州電子科技大学と、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学の計4大学への派遣となりました。それぞれのプログラムについて以下にご報告します。

① 米国 ノーザン・アイオワ大学 英語・文化研修

日程：平成31年2月7日（木）～3月24日（日）（日本発着）

本プログラムでは、山梨大学国際交流センターが交流協定を締結している米国アイオワ州シーダーフォールズにあるUniversity of Northern Iowa（ノーザン・アイオワ大学）のThe Culture and Intensive English Program（CIEP）における英語研修及び同大学での授業やワークショップへの参加に加え、アイオワ州での文化体験と各学生の専門分野に合ったジョブ・シャドイングに参加します。今年度は5名の学生を派遣しました。

CIEPでの4週間の語学研修では、習熟度に合わせて週20-22時間の英語レッスンを受講しました。また、ホームビジットや周辺地域への小旅行等を通して、学んだ英語を実際に使いながら、アメリカ文化を体験することができました。学生からは、「自分の専門分野・興味のある分野の現地企業への訪問は、とても貴重な経験となり、様々な面で日本とアメリカの違いを感じ、学ぶことができた」、「個人・個性をとて尊重する社会を経験でき、刺激になった。自分の意志を相手に伝えることの大切さを実感した」という感想がありました。



現地学生との交流



授業の様子



ジョブ・シャドイング

② 英国 レスター大学 英語・文化研修

日程：平成31年2月10日（日）～3月10日（日）（日本発着日）

本プログラムは、山梨大学が交流協定を締結している英国イングランド中部レスター市にある University of Leister（レスター大学）の English Language Teaching Unit（ELTU）において、英語力とコミュニケーション・スキルの向上を目的とした学習のほか、地域の人々との交流、同大学の学生と意見交換などの交流、近くの学校訪問等の英国文化体験を行います。全日程ホームステイで実施され、英国での家庭生活を体験することができます。また、ロンドン、ストラトフォード、オックスフォード等への日帰り旅行も研修に含ま

れます。平成 30 年度は 10 名の学生を派遣しました。参加学生からは、「学校訪問や、ホストファミリーとの会話で日本に関して説明する機会があり、自分の国のことについて紹介する楽しさを知ったと同時に、もったときちんと自分の国・文化に対しての知識を増やす必要があると実感した。」などの感想が寄せられました。



現地学校訪問の様子



ホストファミリーとの交流



日帰り旅行

③ 中国 杭州電子科技大学 中国語・文化研修+海外インターンシップ

日程：平成 31 年 3 月 10 日（日）～3 月 25 日（月）（日本発着日）

本プログラムでは、山梨大学が交流協定を締結している中国浙江省杭州市にある杭州電子科技大学において 1 週間の中国語・中国文化研修と、日系企業テルモ杭州工場における 1 週間のインターンシップを行うプログラムです。本プログラムには、15 名の学生が参加しました。

杭州市は近年、アリババなど中国を代表する IT 企業の本拠地としても注目されており、研修先である杭州電子科技大学は、電子情報分野において中国国内で常に高いランキングを有する総合大学です。このプログラムは中国語の学習経験がない学生も参加可能としており、杭州電子科技大学学生との交流や文化体験などのイベントを通して、異文化コミュニケーションを体得します。インターンシップ受け入れ先であるテルモ杭州工場は、もっとも早く中国進出を果たした日本企業の一つであり、日本人スタッフの補助を得ながら、工場の業務を実際に体験することができます。参加した学生からは、「バディとの交流を通し、現地学生の生活を直接知ることが出来、また彼らの勤勉さにとても刺激を受けた」、「英語だけでなく、中国語にも触れることができ、新たに習得した言葉が通じた時の喜びを感じることができた。言語を習得する楽しさを知った」という感想が多く聞かれました。インターンシップについては、「海外で働くことに興味が出た」、「大学で学んでいることと関連することが多く、今大学で学んでいることの重要性を理解した」という感想が聞かれました。



文化体験の様子



エクスカーション



修了式

④ カナダ ブリティッシュ・コロンビア大学 英語・文化研修

日程：平成 31 年 2 月 24 日（日）～3 月 24 日（日）（日本発着日）

本プログラムは、カナダ・ブリティッシュコロンビア州にある The University of British Columbia (ブリティッシュ・コロンビア大学) キャンパスにある English Language Institute (ELI) で開講される「English for the Global Citizen」というコースに参加するものとなっています。平成 30 年度は 10 名の

学生を派遣しました。

1週間の授業時間数26.5時間のこのコースは、話す力を鍛え、流ちょうな英語を習得することを目指すものです。滞在先はカナダ人家庭でのホームステイとなっており、Cultural Assistant(CA)という現地学生のサポートもつくため、現地の人々とのコミュニケーションを通して、短期集中的に英語力の向上が期待できるプログラムとなっています。

参加学生の中では、「現地での生活、CAやホストファミリーとの会話を通して、教科書での英語の勉強がいくらできても話せる力とは違うことを痛感した」という学生が多く、コミュニケーションがスムーズにいかないもどかしさや、悔しさから、英語習得へのモチベーションが上がったとの感想が多く寄せられました。



ホストファミリーとの交流



プログラム終了時のパーティーの様子



現地学生との交流

(3) 四川大学国際交流合宿（工学部/工学専攻学生対象）：平成30年7月8日（日）～16日（月）

工学部コンピュータ理工学科及び情報メカトロニクス工学科の学生および医工農学総合教育部工学専攻の学生が、交流協定校である中国・四川省成都市にある四川大学で開催された国際交流プログラム「2018 University Immersion Program」に参加しました。

同プログラムには30ヶ国以上から数百名の大学生が参加し、学生はグローバルな視点を育むための多種多様な交流活動を体験します。この内、平成30年7月8日（日）～16日（月）まで開催された同大ソフトウェアエンジニアリング学部主催の合宿プログラム「Sparks & Sprout」に本学も招待され、学部生及び大学院生20名が参加しました。

合宿プログラムでは、最先端の研究者による計算機科学に関する英語での集中講義、ソフトウェア開発会社の見学、ソフトウェア開発プロジェクトのプレゼンテーション、同大と本学との混成チームによるグループワーク、中国の文化・歴史の体験交流など、多彩な活動が実施されました。

本学ではグローバル・パートナーシップの形成などにより、本学の学生に海外の研究者や学生と協働して問題解決に取り組む機会を提供することを第3期中期計画に掲げています。今回の合宿では、協定校との連携強化とともに、グローバル人材育成に向けて、学生は異文化に触れるだけでなく、国際的な舞台におけるコミュニケーション能力とチームワーク能力の形成に努めました。



Sparks & Sprout 開幕式



開幕式での本学代表学生挨拶



四川大学の学生との交流



グループワークの様子



山梨大学紹介プレゼンテーション



ソフトウェア開発プロジェクト報告会

3. 海外留学の事前指導およびフォローアップ

本学のプログラムで留学する学生に対しては、交換留学及び海外研修プログラムともに、事前指導や帰国報告会などのフォローアップを行っています。インターンシップが含まれる研修に参加する学生に対する事前指導のひとつとして、インターンシップマナー講座も開講しています。以下に、これらの取り組みについて報告します。

(1) 平成30年度 交換留学・海外研修プログラム帰国報告会

この報告会への出席・発表は、交換留学・海外研修プログラム共に、本学の交流協定校へ留学をした学生すべてに課しているものです。発表を行う学生は各々に準備したスライド資料を用いて、研修の様子、成果などを報告します。平成30年度は、1回目を6月5日（火）に、2回目を11月26日（月）に開催しました。

1回目には、平成29年度春休みに2～4週間の春季海外研修プログラム（米国ノーザン・アイオワ大学英語・文化研修、米国アイオワ大学英語・文化研修＋海外インターンシップ、英国レスター大学英語・文化研修及び中国杭州電子科技大学中国語・文化研修＋海外インターンシップ）に参加した、計36名の学生がそれぞれの留学・研修成果について報告しました。

2回目には、米国イースタン・ケンタッキー大学（EKU）へ約1年間の交換留学を経験した学生3名（平成30年5月帰国）と、夏季の海外研修に参加した学生19名（イースタン・ケンタッキー大学10名、グランド・ビュー大学9名）がそれぞれの留学・研修成果を発表しました。

これら報告会は、留学した学生に対して、自身の経験を振り返り、留学・研修の経験が学習意欲やキャリア形成に及ぼした影響を再確認することを期待するとともに、これから留学を考えている学生に対する啓発も兼ねています。実際に、留学を経験した学生たちからの留学先での授業、文化、生活そして職業体験などの報告は、これから留学に臨もうという学生の疑問や不安を解消し、留学への意識を高める良い機会となっています。



堀国際交流担当理事ご挨拶



海外研修プログラム参加学生の発表



イースタン・ケンタッキー大学
交換留学派遣学生の発表

(2) 海外インターンシップマナー講座

このマナー講座は主に、インターンシップ研修に参加する学生の事前指導の一環として開講しています。平成30年度は7月3日（火）に株式会社ブリヂストン デモイン事業所の森脇厚二氏を、1月28日（月）にテルモ株式会社の仲田恒夫氏を講師としてお招きして、2回開講しました。米国アイオワ州にある株式会社ブリヂストン デモイン事業所は、グランド・ビュー大学英語・文化研修＋海外インターンシッププログラムの中で、テルモ株式会社は杭州電子科技大学中国語・文化研修＋海外インターンシッププログラムの中ど

で、それぞれインターンシップ受け入れ先となっています。実際に海外勤務を経験された講師による講義は、学生のモチベーションの向上を促すとともに、インターンシップに臨む実的な準備に非常に役立ったと、毎回好評を得ています。



講師の仲田恒夫氏(テルモ株式会社)



講師のお話熱心に聞き入る学生たち

(3) 海外研修プログラム参加学生に対するアンケート

海外研修プログラムに参加する学生を対象に、留学前・留学後のアンケート調査を行っています。異文化交流や語学学習、インターンシップ等の留学体験を通じて学生にどのような変化があるのかを測ると同時に、参加者の声を聞くことによって、次年度以降の海外研修プログラムの充実化を図っています。

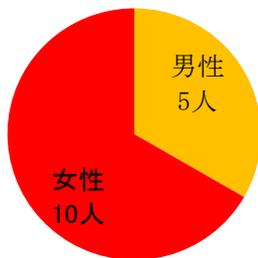
本報告書では、下記3つのプログラム参加学生に対するアンケート結果を紹介します。

- ① 平成30年度中国 杭州電子科技大学中国語・文化研修+海外インターンシッププログラム
- ② 平成30年度英国 レスター大学英语・文化研修プログラム
- ③ 平成30年度カナダ ブリティッシュ・コロンビア大学英语・文化研修プログラム

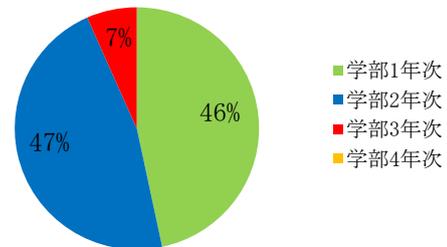
① 平成30年度中国杭州電子科技大学中国語・文化研修+海外インターンシッププログラム アンケート結果

<参加者内訳>

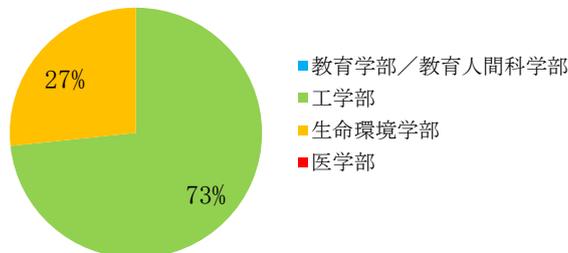
参加者内訳



参加者学年

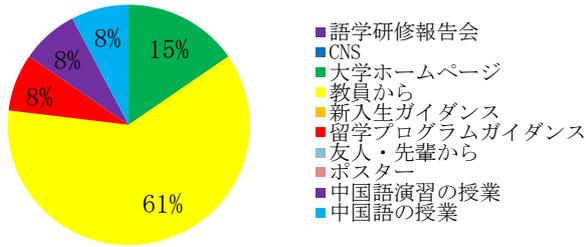


参加者所属学部

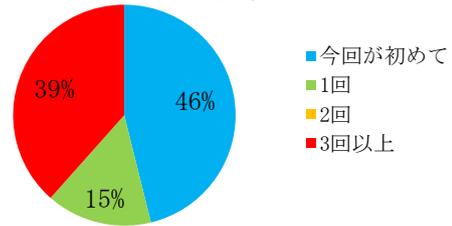


<各項目回答>

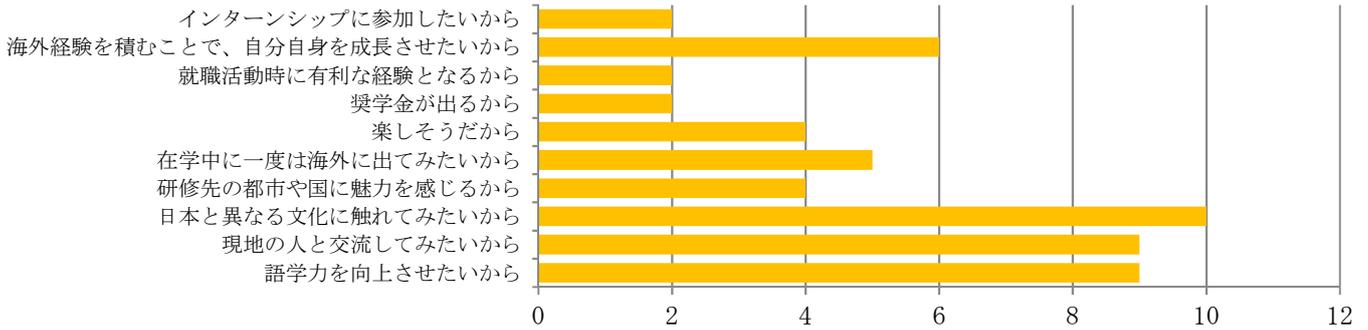
この語学研修を何で知りましたか？



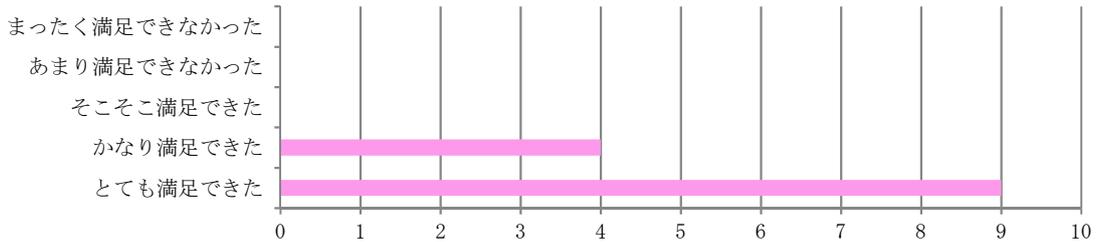
これまでに海外に行ったことはありますか？



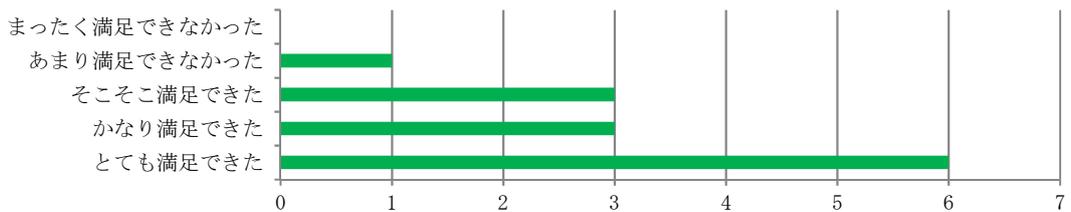
なぜ本研修に参加しようと思いましたか（複数回答可）。



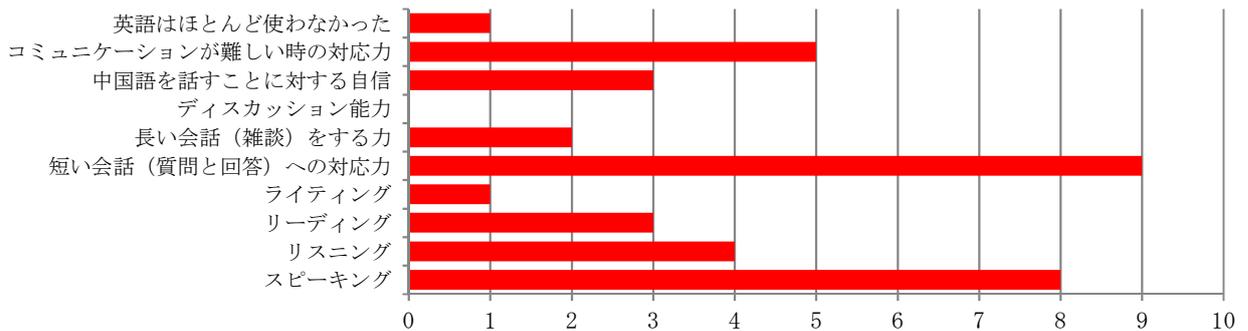
研修プログラムは満足できましたか？



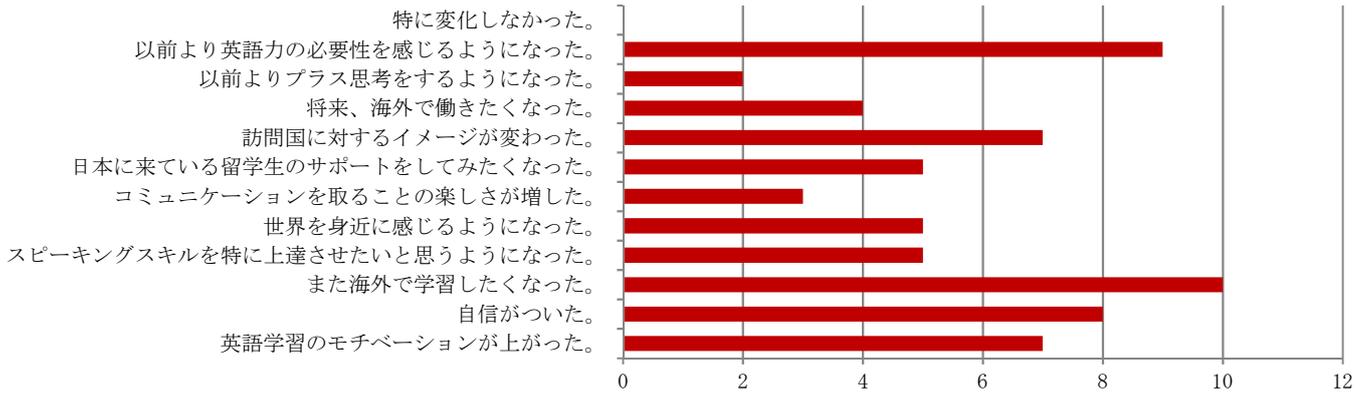
インターンシップは満足できましたか？



この研修で英語力の中のどのようなスキルが特に上達したと思いますか？
(複数回答可)

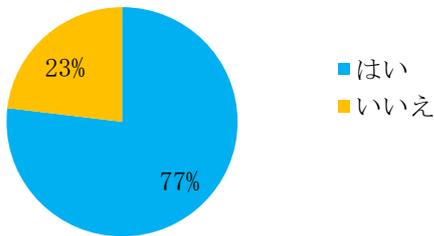


この研修によって、あなた自身は何か変化しましたか？（複数回答可）



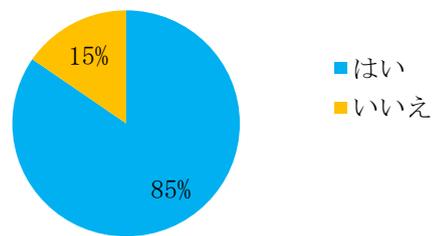
<留学前後比較調査>

将来、海外で働いてみたいですか？

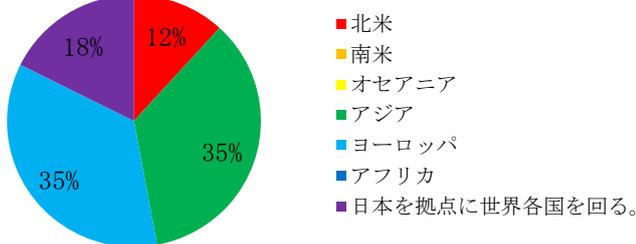


前 → 後

将来、海外で働いてみたいですか？

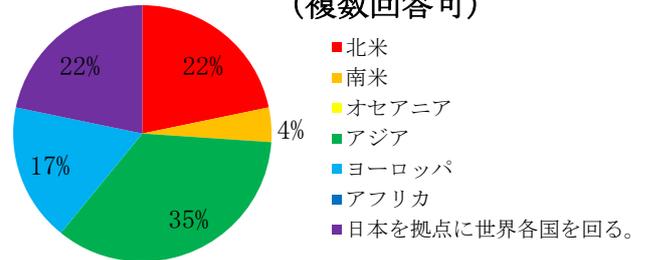


どのエリアで働いてみたいですか？
（複数回答可）

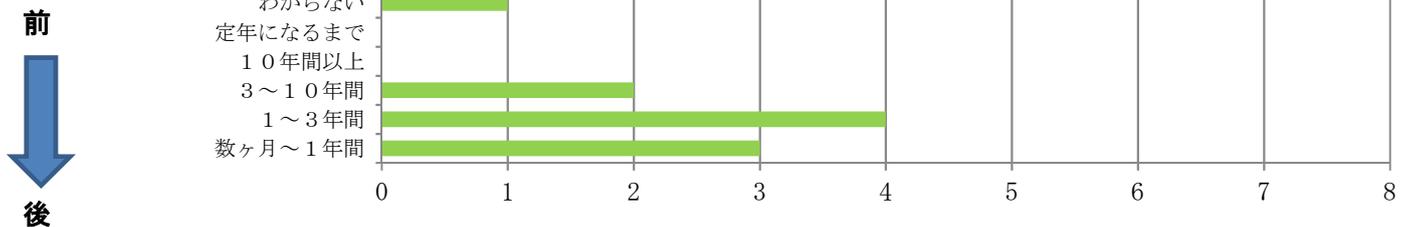


前 → 後

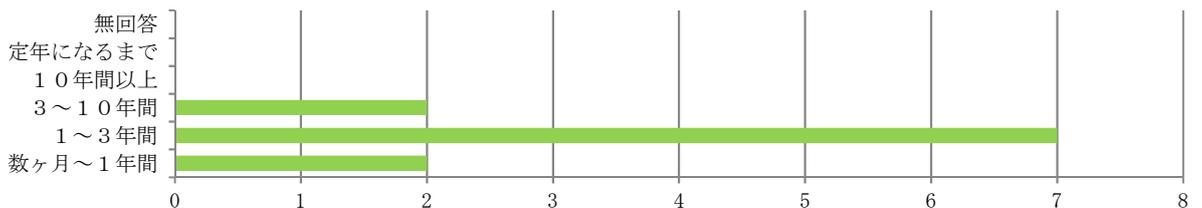
どのエリアで働いてみたいですか？
（複数回答可）



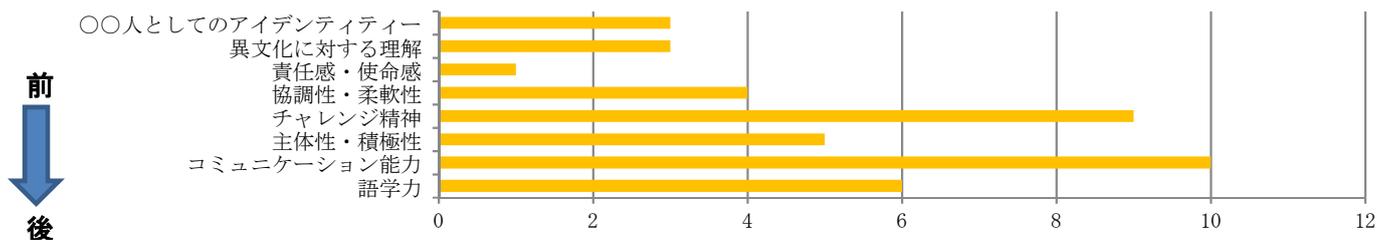
どのくらいの期間、働いてみたいですか？



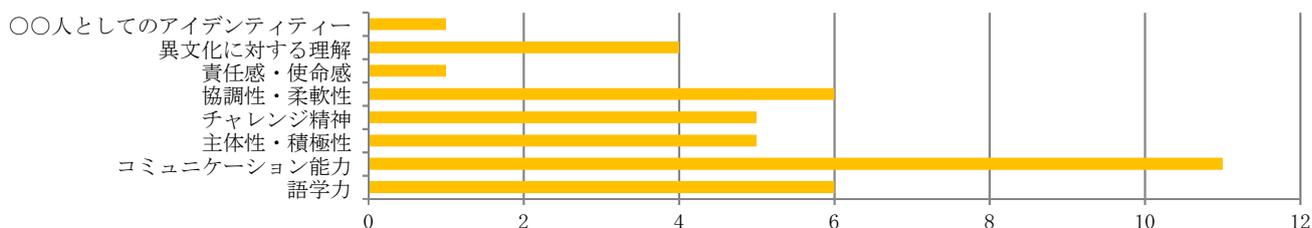
どのくらいの期間、働いてみたいですか？



グローバル人材の条件として特に重要だと思う項目を3つ選んでください。

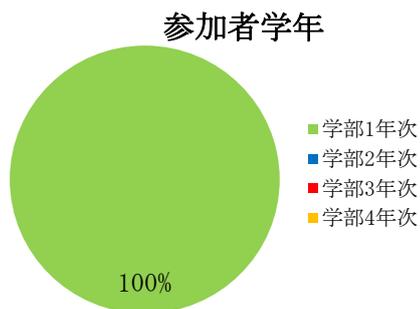
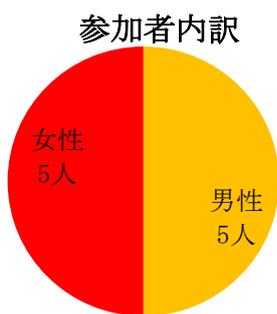


グローバル人材の条件として特に重要だと思う項目を3つ選んでください。

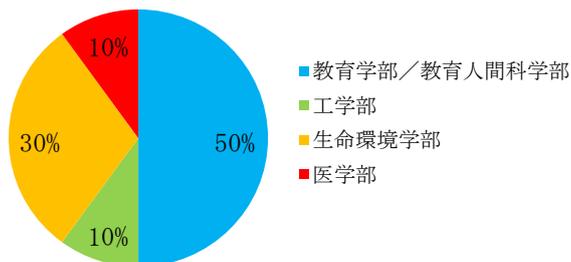


② 平成 30 年度レスター大学英語・文化研修プログラム アンケート結果

<参加者内訳>

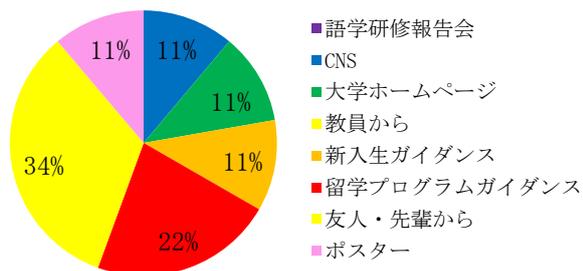


参加者所属学部

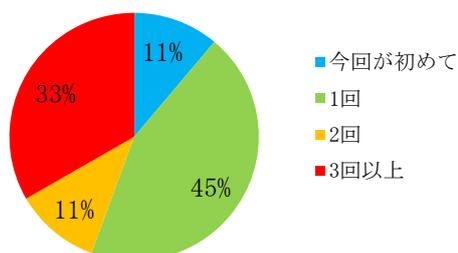


<各項目回答>

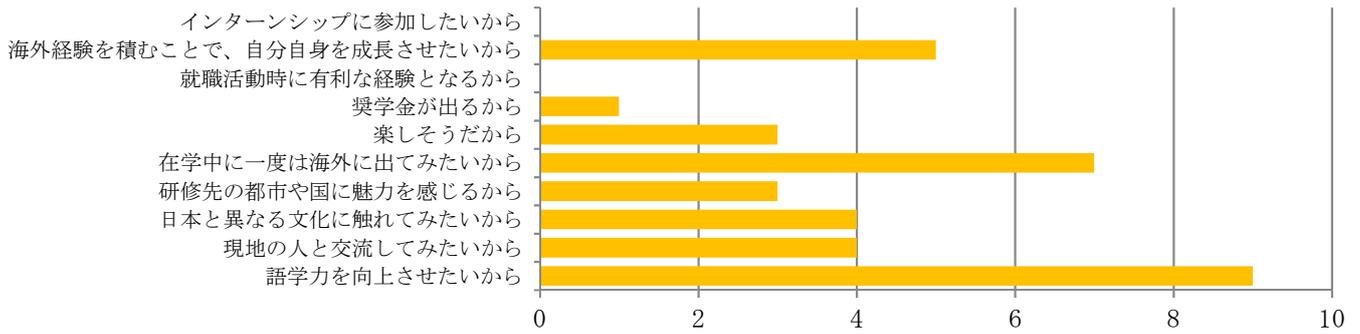
この語学研修を何で知りましたか？



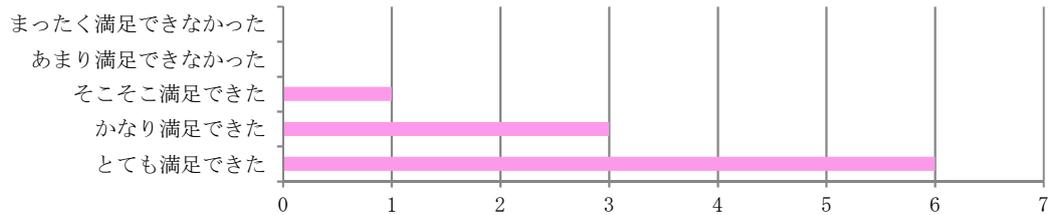
これまでに海外に行ったことはありますか？



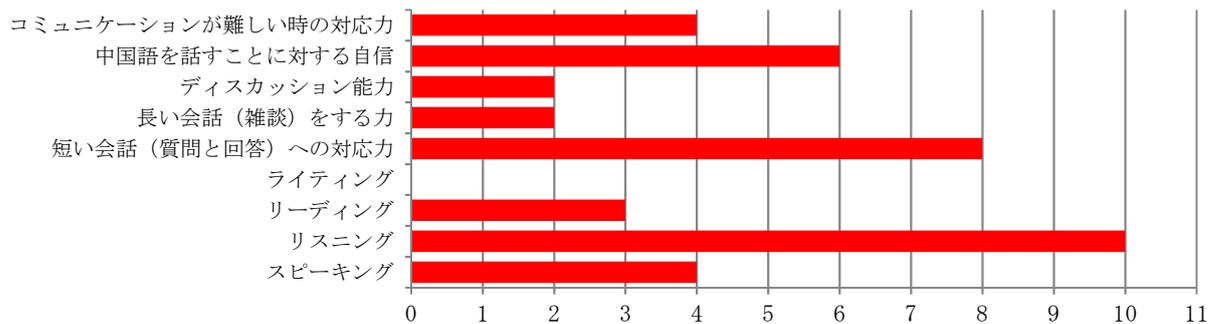
なぜ本研修に参加しようと思いましたが（複数回答可）。



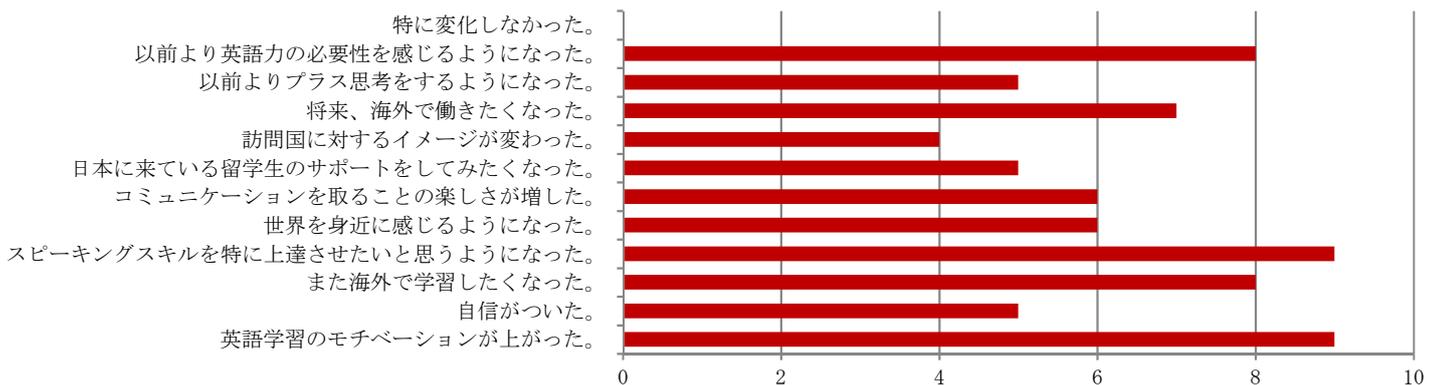
研修プログラムは満足できましたか？



この研修で英語力の中のどのようなスキルが特に上達したと思いますか？
（複数回答可）



この研修によって、あなた自身は何か変化しましたか？（複数回答可）

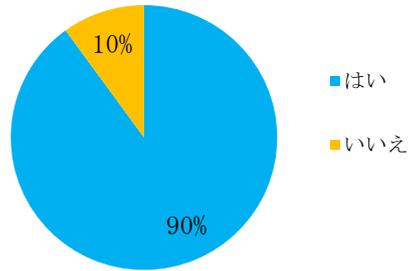
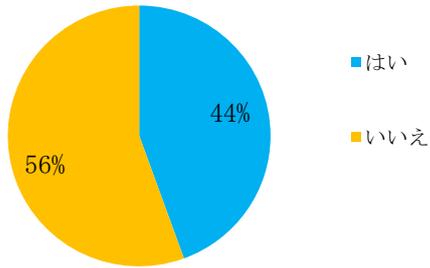


＜留学前後比較調査＞

将来、海外で働いてみたいですか？

前 → 後

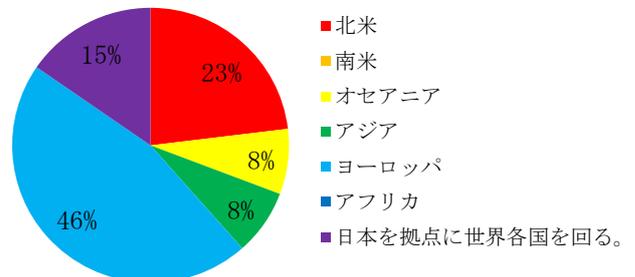
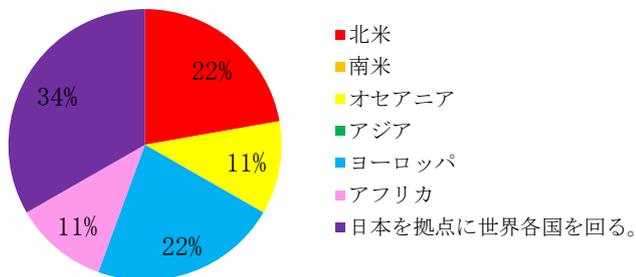
将来、海外で働いてみたいですか？



どのエリアで働いてみたいですか？
(複数回答可)

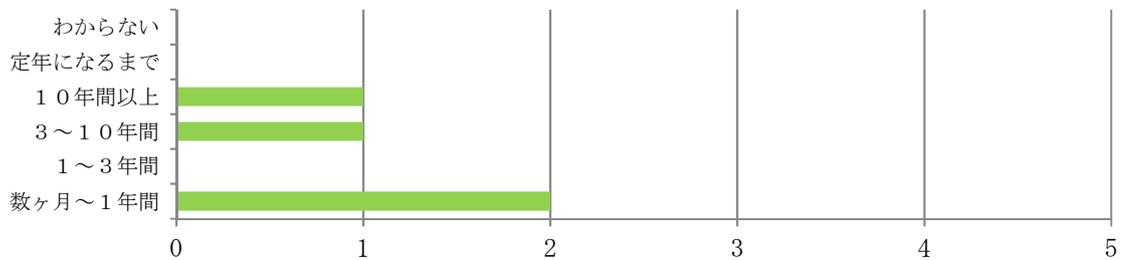
前 → 後

どのエリアで働いてみたいですか？
(複数回答可)

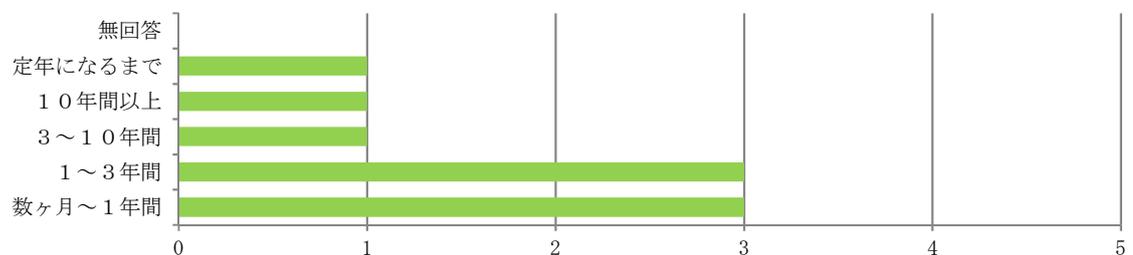


どのくらいの期間、働いてみたいですか？

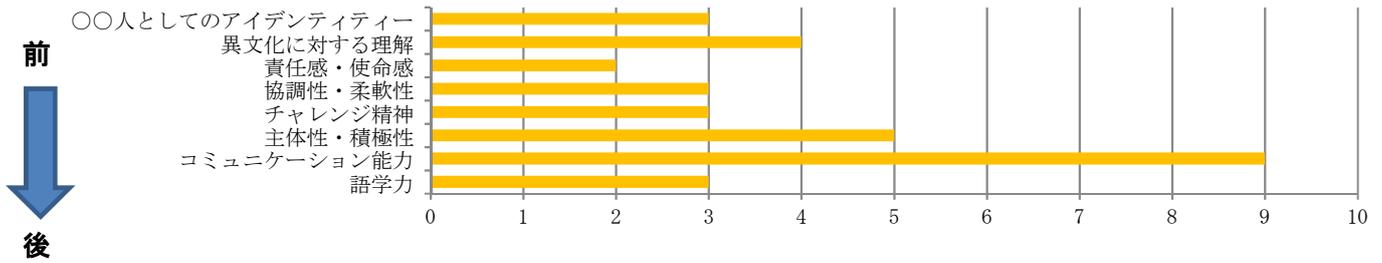
前 ↓ 後



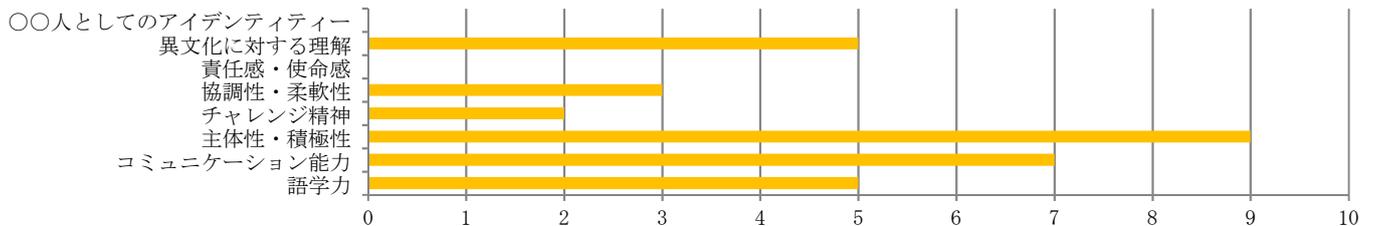
どのくらいの期間、働いてみたいですか？



グローバル人材の条件として特に重要だと思う項目を3つ選んでください。

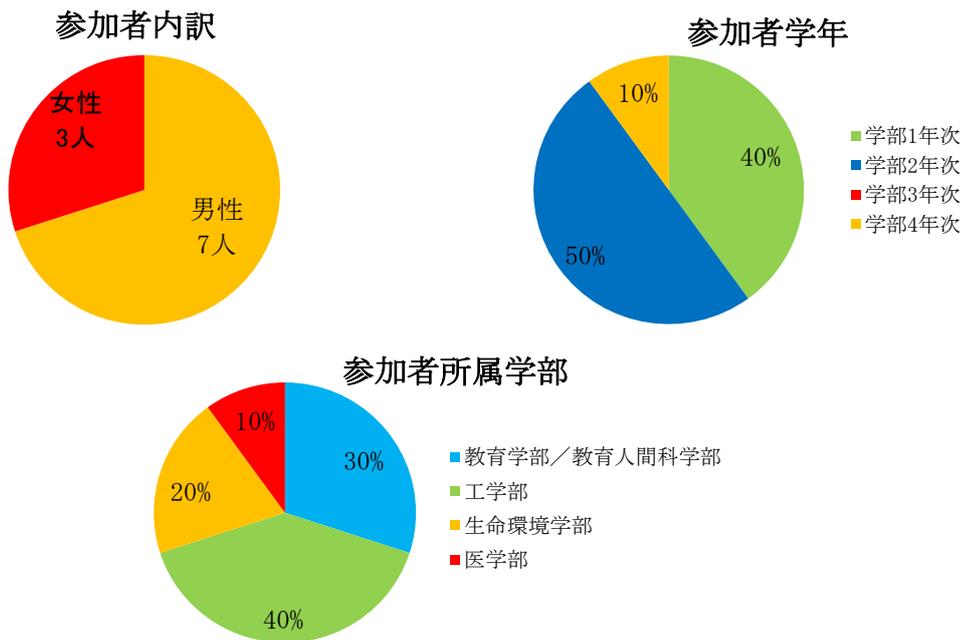


グローバル人材の条件として特に重要だと思う項目を3つ選んでください。

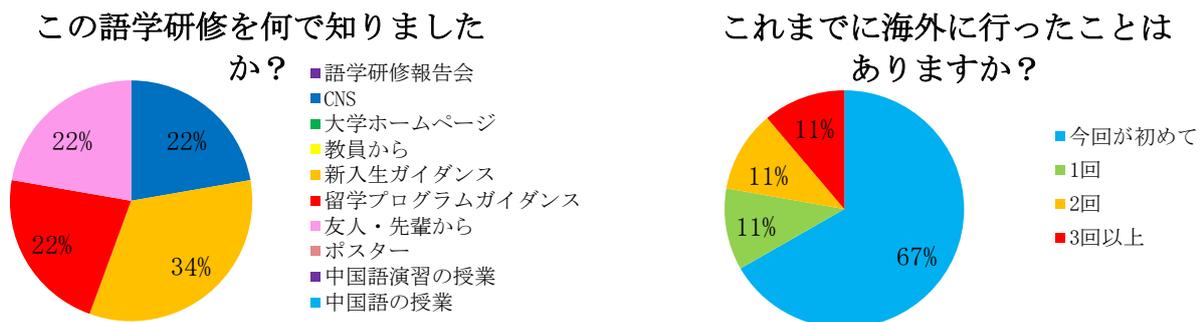


③ 平成 30 年度カナダ プリティッシュ・コロンビア大学英语・文化研修プログラム アンケート結果

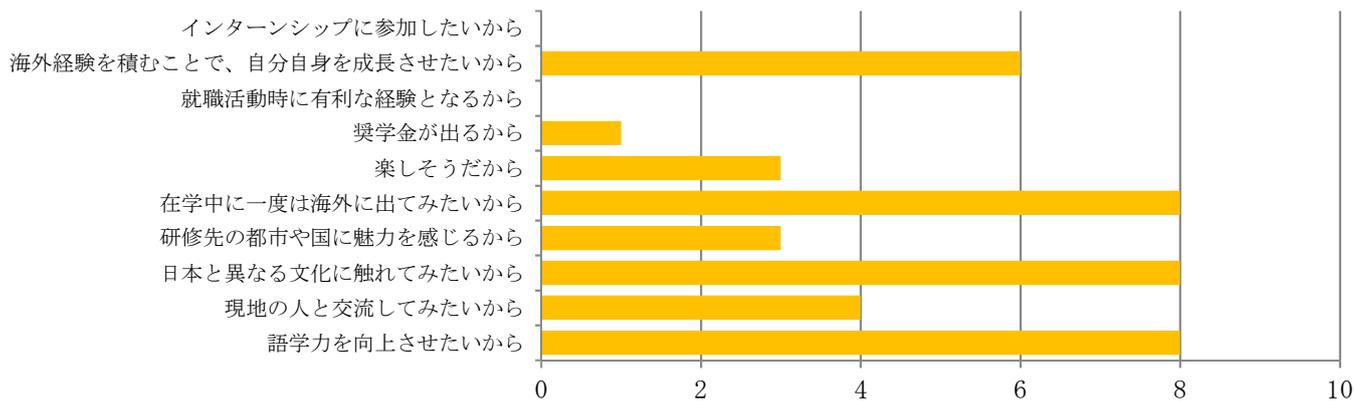
<参加者内訳>



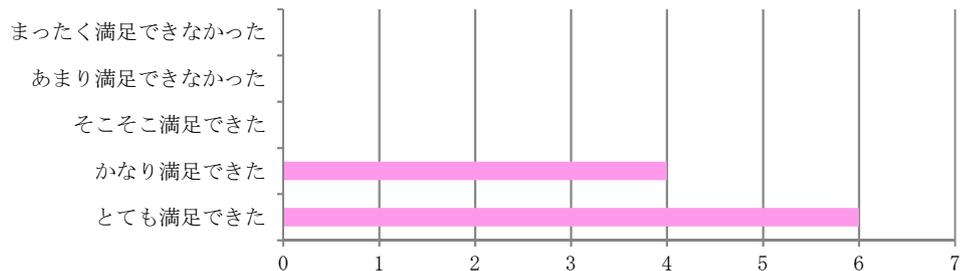
<各項目回答>



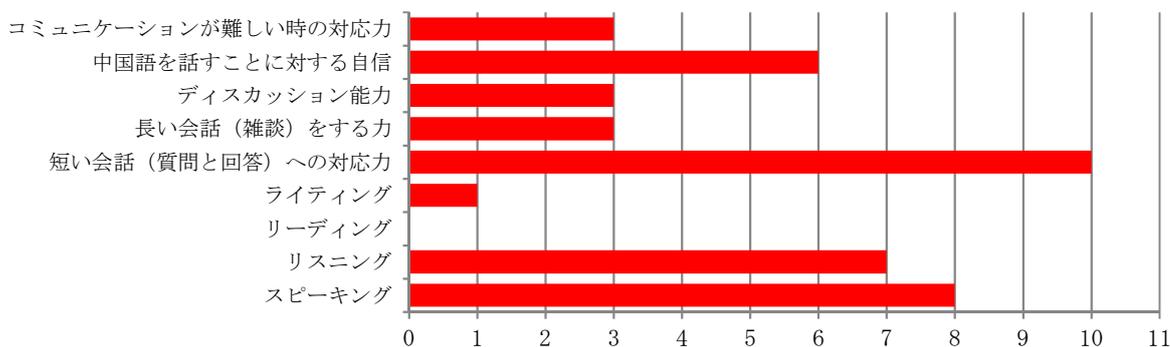
なぜ本研修に参加しようと思いましたが（複数回答可）。



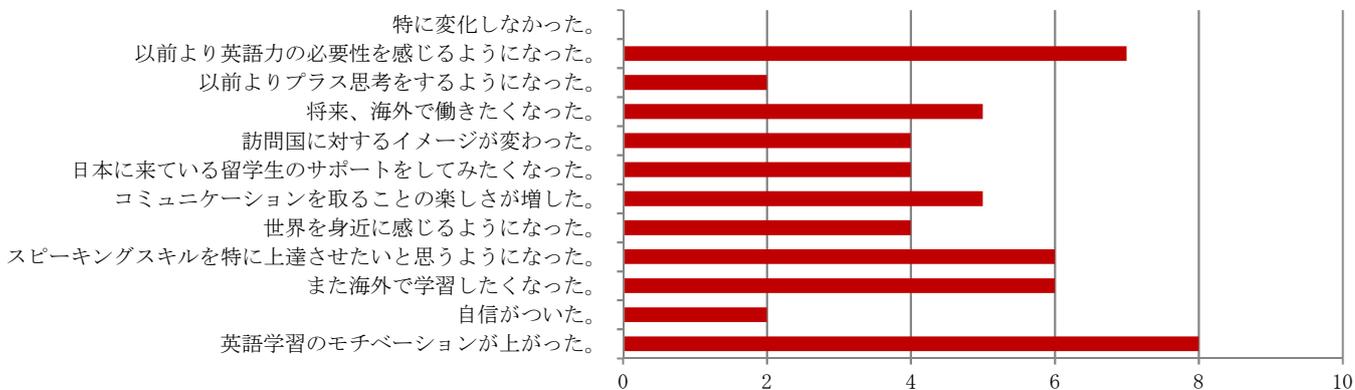
研修プログラムは満足できましたか？



この研修で英語力の中のどのようなスキルが特に上達したと思いますか？
（複数回答可）



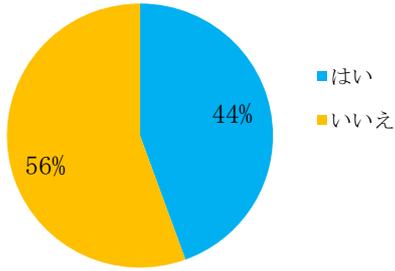
この研修によって、あなた自身は何か変化しましたか？（複数回答可）



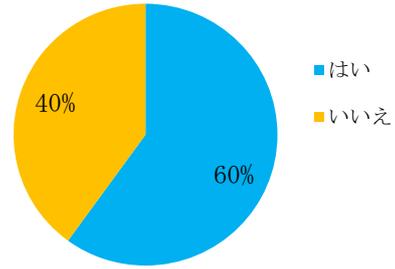
＜留学前後比較調査＞

将来、海外で働いてみたいですか？

前 → 後

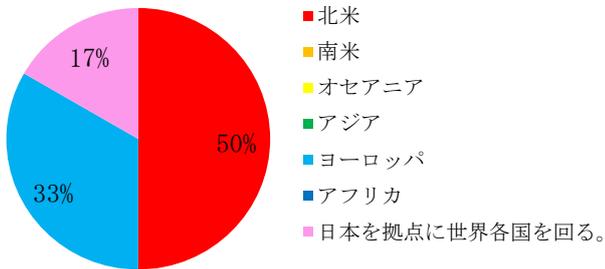


将来、海外で働いてみたいですか？

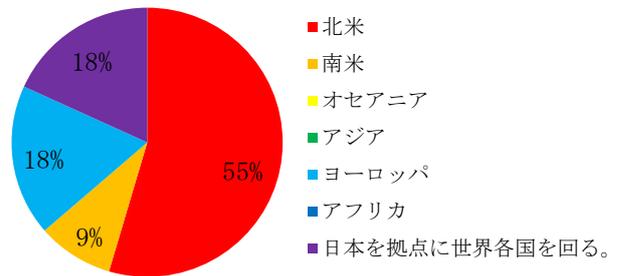


どのエリアで働いてみたいですか？
(複数回答可)

前 → 後

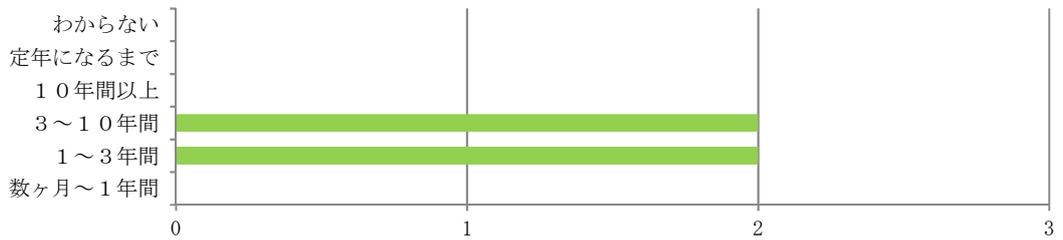


どのエリアで働いてみたいですか？
(複数回答可)

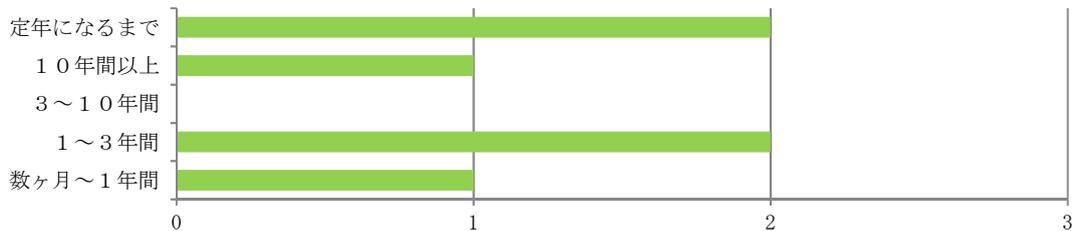


どのくらいの期間、働いてみたいですか？

前 ↓ 後

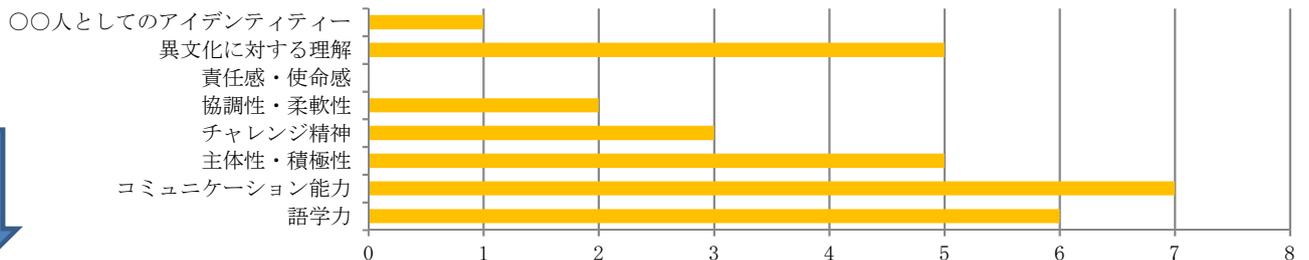


どのくらいの期間、働いてみたいですか？

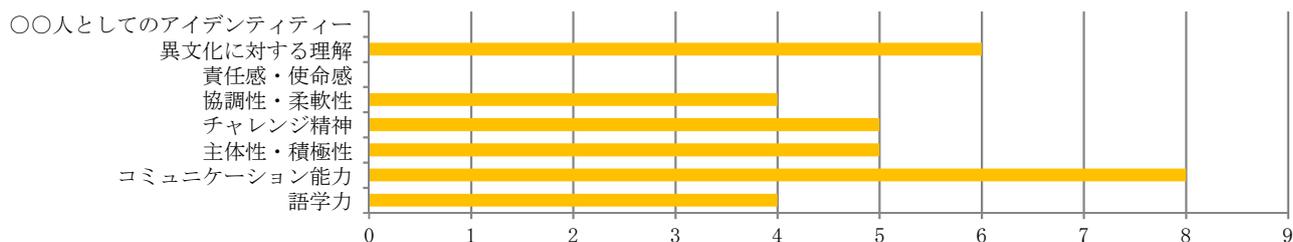


グローバル人材の条件として特に重要だと思う項目を3つ選んでください。

前 ↓ 後



グローバル人材の条件として特に重要だと思う項目を3つ選んでください。



海外からの受入れ

1. 日本語・日本文化短期プログラム (University of Yamanashi Summer Program 2018)

本プログラムは海外の交流協定校との関係を強化し、本学の国際化を推進することを目的として、本学と学生交流協定を締結している海外大学の学生を対象に、国際企画課及び学内関連部署の協力を得て、平成 28 年度から国際交流センターが実施しているものです。今年度は、杭州電子科技大学（中国）から 20 名、シドニー工科大学（オーストラリア）から 5 名、オックスフォード・ブルックス大学（英国）から 1 名、リュブリャナ大学（スロベニア）から 1 名の、合わせて 27 名が参加しました。

プログラム初日となる 7 月 9 日（月）には、甲府キャンパスにおいてウェルカムパーティーを開催しました。パーティーでは、北村眞一学長補佐からのご挨拶のあと、研修生代表から抱負の発表、また、本学学生代表からの歓迎の言葉があり、その後、研修生・本学学生・教職員ら計 80 名による懇談会が行われ、国際交流を楽しみました。

受入れ期間は 7 月 8 日（日）～8 月 4 日（土）の 4 週間で、この間に日本語授業はもちろんのこと、生け花をはじめ、琴と尺八に関するレクチャーと体験、トンボ玉づくりや柔道、茶道、浴衣着付け等、様々な伝統的日本文化を体験して学び、さらに日本語で調査を行って最終的にプレゼンテーションを行うプログラムとなっています。



オープニングセレモニー



歓迎の言葉を述べられた北村学長補佐



パーティーを楽しむ参加者

	6/25	6/26	6/27	6/28	6/29	6/30	7/1	7/2	7/3	7/4	7/5	7/6	7/7	7/8
I	9:00													
II	10:30													
III	13:10													
IV	14:40													
V	14:50													
	16:20													
	16:30													
	18:00													

	7/9	7/10	7/11	7/12	7/13	7/14	7/15	7/16	7/17	7/18	7/19	7/20	7/21	7/22
I														
II														
III														
IV														
V														

	7/23	7/24	7/25	7/26	7/27	7/28	7/29	7/30	7/31	8/1	8/2	8/3	8/4	8/5
I														
II														
III														
IV														
V														

	6/25	6/26	6/27	6/28	6/29	6/30	7/1	7/2	7/3	7/4	7/5	7/6	7/7	7/8
I	9:00													
II	10:30													
III	13:10													
IV	14:40													
V	14:50													
	16:20													
	16:30													
	18:00													

	7/9	7/10	7/11	7/12	7/13	7/14	7/15	7/16	7/17	7/18	7/19	7/20	7/21	7/22
I														
II														
III														
IV														
V														

	7/23	7/24	7/25	7/26	7/27	7/28	7/29	7/30	7/31	8/1	8/2	8/3	8/4	8/5
I														
II														
III														
IV														
V														

	6/25	6/26	6/27	6/28	6/29	6/30	7/1	7/2	7/3	7/4	7/5	7/6	7/7	7/8
I	9:00													
II	10:30													
III	13:10													
IV	14:40													
V	14:50													
	16:20													
	16:30													
	18:00													

	7/9	7/10	7/11	7/12	7/13	7/14	7/15	7/16	7/17	7/18	7/19	7/20	7/21	7/22
I														
II														
III														
IV														
V														

	7/23	7/24	7/25	7/26	7/27	7/28	7/29	7/30	7/31	8/1	8/2	8/3	8/4	8/5
I														
II														
III														
IV														
V														

	6/25	6/26	6/27	6/28	6/29	6/30	7/1	7/2	7/3	7/4	7/5	7/6	7/7	7/8
I	9:00													
II	10:30													
III	13:10													
IV	14:40													
V	14:50													
	16:20													
	16:30													
	18:00													

	7/9	7/10	7/11	7/12	7/13	7/14	7/15	7/16	7/17	7/18	7/19	7/20	7/21	7/22
I														
II														
III														
IV														
V														

	7/23	7/24	7/25	7/26	7/27	7/28	7/29	7/30	7/31	8/1	8/2	8/3	8/4	8/5
I														
II														
III														
IV														
V														

	6/25	6/26	6/27	6/28	6/29	6/30	7/1	7/2	7/3	7/4	7/5	7/6	7/7	7/8
I	9:00													
II	10:30													
III	13:10													
IV	14:40													
V	14:50													
	16:20													
	16:30													
	18:00													

	7/9	7/10	7/11	7/12	7/13	7/14	7/15	7/16	7/17	7/18	7/19	7/20	7/21	7/22
I														
II														
III														
IV														
V														

	7/23	7/24	7/25	7/26	7/27	7/28	7/29	7/30	7/31	8/1	8/2	8/3	8/4	8/5
I														
II														
III														
IV														
V														

(1) 日本語授業

日本語のレベルは Course1、A、B の 3 つとし、Course1 は日本語学習時間が 25 時間以下の学生を、Course A は日本語学習時間が 25 時間から 75 時間までの学生を、Course B は日本語学習時間が 75 時間から 100 時間までの学生を対象としました。テキストは『Marugoto』（三修社）の A1 から A2 レベルのものを、各コースともこのプログラム内でテキスト 1 冊の日本語学習を終えるようになっています。

(2) 日本文化体験・研究施設見学

どのコースの学生も合同で日本文化の授業を受け、体験・見学をしました。また適宜、英語、中国語の通訳と、サポート役の本学学生を配置し、日本文化への理解が深まるように配慮しました。実施した日本文化

体験・研究施設見学は以下のとおりです（実施順。⑬は猛暑のため実施せず）。

- ①生け花 ②浴衣着付け ③うちわデコレーション ④流しそうめん（本学G-フィロスイベント） ⑤茶道
⑥暑中見舞いづくり ⑦研究室訪問 ⑧富士山と新倉富士浅間神社へのエクスカージョン
⑨本学ワイン科学研究センター訪問 ⑩トンボ玉作り ⑪本学燃料電池ナノ材料研究センター訪問 ⑫柔道
⑬カレー作り ⑭有機農園における桃狩り（於：笛吹市） ⑮箏と尺八 ⑯花火見学（於：山梨市）

いずれの日本文化体験・研究施設見学もおおむね好評で、上記の体験についてプログラム終了後に満足度を尋ねるアンケート（回答者数 25）を行ったところ、すべての項目が5段階中平均4以上となりました（最高4.92、最低4.24）。さらに、「これらの体験を通してより日本文化を学ぼうと思ったか」という設問に対しては、92%の学生が「強くそう思う」、残りの8%の学生が「そう思う」と答えていることから、本学での体験が学生の日本文化への興味を強く引き出したことがわかります。

なお、この日本文化体験・研究施設見学はほぼ本学甲府キャンパス内で行われており、本学の各センター、学生のクラブなど関係各所の多大な協力を得て行われました。



生け花体験



浴衣着付け



流しそうめん体験(G-フィロスの夏祭り)



エクスカージョン(新倉山浅間公園)



富士山五合目付近の散策



柔道体験



ワイン科学研究センター見学



箏の体験



尺八の体験

(3) グローバル合宿

本学のグローバル人材育成プログラムの学生14名と合同の1泊2日の合宿もプログラムに盛り込まれています。これは、ディスカッションやアクティビティを通してお互いの文化を知るために行われたものです。このグローバル合宿は、山梨県北杜市内の羽村市自然休暇村で行われました。ディスカッションやアクティ

ビティは、基本的には本学学生 14 名が事前に準備し、適宜担当教職員がアドバイスしました。この合宿に参加した本学学生の満足度は 5 段階中 4.93 であり、記述式の回答からはグローバルマインド涵養に一役買ったことがうかがえました。



混合グループでの炊事



ワークショップ



合宿での集合写真

(4) 日本語プレゼンテーション

まず、27 名の参加者を 4~5 人の 6 つのグループに分けました。テーマ決めから調査、分析、考察、発表準備、提示資料作成までの計 10 コマの授業を行い、8 月 3 日（金）にプレゼンテーションを行いました。プレゼンテーションは質疑応答を含めて 1 グループ 20 分で、発表言語は日本語のみとしましたが、提示資料や質疑応答の言語は英語、中国語も可として行いました。発表のテーマは、「日本人の中国のイメージ」、「Food Culture」、「Japanese University Students' Movie Lives」、「The Japanese Event」、「食べ物—すし」、「日本人がテレビを見ること」の 6 つでした。

なお、このプレゼンテーションに関する調査については、オンラインアンケートなどは禁止し、必ず口頭で複数の日本語母語話者に日本語で尋ねて、回答を学習者自身が書き留める方法を採用するように指導しました。Course 1 の参加者の中には日本語学習歴が全くない学生もいたものの、声のかけ方から感謝の述べ方までの一連の日本語を覚えて、本学甲府キャンパス内外において調査にあたっていました。調査協力者は計 301 人にもものぼり、UYSP に参加した学生が平均 11 人の日本語母語話者に対して調査を行ったこととなります。プレゼンテーション当日は、上記グローバル合宿参加学生や後述のバディも聴取に参加し、活発な質疑応答が行われました。また、発表をお互いに評価し合ってもらい、後の日本語学習にもつながるようにしました。

(5) バディ制度

本プログラムに参加した外国人学生 1 人につき、本学学生 1~2 名がバディとして任命され、プログラム期間中の生活・観光・日本語のサポートなどにあたりました。このバディには数多くの応募があり、平成 30 年度は 37 名がバディとして採用されました。バディには「〇〇をしなければならない」といった指示は特段与えず、プログラム参加学生と共に過ごす時間を週 1 回以上設けるようにと伝えて活動してもらいました。バディの事後報告によると、多くがこの制度に満足しており、一部の学生はこの経験が、後の海外研修や留学につながっているため、本制度が本学の国際交流に大きく寄与していると思われる。

(6) インスタグラムへの投稿

学習の記録として、インスタグラムへの投稿を本プログラム参加者に義務付けました。投稿する際にはハッシュタグ「#UYSP2018」を必ず付与しているため、後に情報が散逸することを防いでいます。担当教員からのものも含め、285 件の投稿があり、海外に向けて山梨大学を広く発信することにもつながりました。以下のページで投稿を見ることができます。

<https://www.instagram.com/explore/tags/uysp2018/> (以下の写真は左記ページの一部抜粋)



2. 学生訪問団の受入れ

交流協定校や、その他の教育機関等からの要望を受け、短期での学生訪問も受け入れています。このような短期受入れの際には、歓迎会や合同国際ワークショップを開催するなどして、本学学生から参加希望者を募り、学生に国際交流の機会を提供しています。

瀋陽薬科大学（中国）学生の訪問受入れ：平成31年1月22日（火）～1月25日（金）

中国の瀋陽薬科大学より、学生7名が来学しました。瀋陽薬科大学とは、平成27年3月に大学間交流協定を締結し、昨年度に引き続き2度目の学生訪問団受入れとなりました。

初日は、茅センター長による大学紹介からはじまり、キャンパスツアー及び甲府市ボランティアの方々による甲府市内見学を行いました。夕方には、歓迎会と日本人学生による日本文化紹介を通して、本学学生との交流を楽しみました。

2日目には、ワイン科学研究センターご協力のもと同センター紹介や、施設訪問を行いました。午後には、学内ものづくりセンターにて、とんぼ玉作り体験や、環境科学科の片岡助教による指導のもと、日中混合の4チームに分かれ、「食品ロス」についてディスカッション、プレゼンテーションを行い両国における「食品ロス」に関する相互理解を深めました。

3日目には、生命環境学域の全面的なご協力を得て、学部・学科紹介や研究室・研究施設訪問などを行いました。また、日本文化体験として学内にて、着付けとお茶の体験を実施しました。

最終日には、富士山・河口湖周辺のエクスカーションを行い4日間の全日程を終えました。



甲府市内散策



歓迎会での国際交流



ワイン科学研究センターの見学



とんぼ玉づくり



合同ワークショップの様子



生命環境学部訪問



茶道体験



ほうとうを楽しむ参加者

3. 国際ワークショップ

日本語・日本文化短期プログラムや、その他海外の学生訪問団受入れの際、本学学生と訪問学生が、国籍混合チームでのグループワークやディスカッションを行う、国際ワークショップを開催しています。これら国際ワークショップでは、本学学生たちに、外国人とのチームワークと、母国語ではない英語での自己表現を学ぶ機会を与えています。

(1) 電気電子技術による「社会の未来像」に関する国際ワークショップ：平成30年7月18日（水）

中国・杭州電子科技大学の学生訪問団が甲府キャンパスに来学し、うち電子情報工学系を専攻する学生8名が、本学工学部電気電子工学科及び修士課程工学専攻電気電子工学コースの学生12名と交流会を開催しました。

交流会では、両大混合グループを結成し、事前の研究室訪問で見学した研究中の技術を基にした「社会の未来像」を描く課題に取り組みました。

学生たちは、各自で描いたアイデアを互いに披露し合い、スマートフォンの翻訳機能を駆使して熱心に語り合うなどして、共同作業で1枚の大きな紙に構想を描きあげました。日中の学生たちは次第に打ち解け合い、全員が笑顔になる素敵な交流会となりました。



交流会の様子



研究室見学

(2) 『食品ロス』に関する国際ワークショップ：平成31年1月23日（水）

本学学生13名と瀋陽薬科大学学生7名がアクティブラーニング室で食品ロスに関する議論を行いました。日中混成の4つのグループに分かれ、グループごとに日本側と中国側の食品ロスに関する情報を共有し、その対策について話し合いました。「賞味期限切れ食品」「規格外食品」「レストランの廃棄」「テイクアウトができない」「宴会の食べ残し」など多くのトピックスが提示されましたが、特に宴会の食べ残しについては中国側からの意見が多くあり、これは中国のおもてなし文化によるものであることがわかりました。

解決策としては、「賞味期限をなくす」、「教育をしっかりと行う」、「寄付」、「飼料・肥料にする」、「食品購入シェアアプリを開発する」などの意見が出されました。また、宴会の食べ残しについても、教育を行うことで少量でも真心が伝わるような文化にしていく必要があるという意見が出ました。興味深いのは、全てのグループから教育をしっかりと行うことで食品ロスは減らせるという意見が出たことです。

参加した本学学生からは、「中国の学生と食品ロスのディスカッションをすることで、食品ロスに対する考え方のちがいや共通点を見つけることができ、それに対して解決策や今後の課題を考える良い機会になったので、とても勉強になった」という感想を得ました。

外国の大学生とのこうした議論の場は、異文化の考え方を知ること、そして、何よりも自分の考えをしっかりと相手に伝えるという基本的な部分を強化する良いトレーニングになります。国際交流センターでは、今後もこうした場を益々増やしていく予定です。



混合チームでのグループワーク



活気のある会場の様子



発表のようす

留学生サポート事業

1. 日本語研修コース

国際交流センターにて開講している日本語研修コースについて、国際交流センター奥村圭子教授の年次報告を以下に掲載して報告します。

2018年度日本語研修コースⅠ第30・31期と研修コースⅡ第15期の報告

奥村圭子

1. 日本語研修コースⅠとⅡの概要

山梨大学で日本語研修コースが開講されたのは、現在の国際交流センターの前身である留学生センターが設立された2003年度の10月であった。当初は、大学院進学を目的とする国費研究留学生向けの日本語予備教育という位置づけで提供された。それから1年後、2004年度後期より日韓共同理工系学部留学生を受け入れるための、学部前の予備教育を開始した。本学では、前者を「日本語研修コースⅠ」、そして後者を「日本語研修コースⅡ」と呼んでいる。日本語研修コースⅠは、「大学院や教員研修における研究生活に入るための基礎的な日本語力の習得をめざすこと」を、日本語研修コースⅡは、「大学・日常生活を円滑に送るため、初級で学んだ知識を運用に結びつけ、読む・書く・聴く・話す、の四技能においてコミュニケーション力を中級レベルへ高めること」を到達目標として掲げている。

研修コースⅠ開講当初は、国費留学生が研究生として大学院入学への準備を進める中で生活や研究室で必要とされる基本的なコミュニケーションができるよう、週4日、一日3コマ、つまり週12コマで15週間に亘って行われる集中日本語コースであった。徐々に、指導教員によっては日本語習得より少しでも早く研究準備を開始してほしいという声も聞かれるようになり、2016年度より授業コマを3コマ削減し、週9コマの準集中コースに形を変え、内容としては、初級後半の半ばまでを学ぶ内容のシラバスに変更し、その段階では研究生という身分の国費留学生も研究準備をしながら日本語習得を目指している。開講当初から国費留学生以外にも、初級前半レベルの交換留学生や、大学院入学を目指す研究生、また研究が一段落ついた大学院生も参加している。

一方、研修コースⅡは、開講当初より本来の対象者である日韓共同理工系学部留学生の受け入れが後期のみであったため、後期のみ開講となっている。しかしながら、長らく学生の配分もない状況が続き、現在は、初級後半から中級入り口のレベルの交換留学生や研究生を対象とした、学部授業への橋渡しとして機能させている。週7コマではあるが、既習の初級レベルの知識を運用力につなげるよう指導している。

いずれの研修コースも、言語のみならず、日本、そして地域社会についても学び、日本と山梨地域文化への理解を深めることも目標としている。

これらのいずれのコースも、2016年度より研修コースⅠの前期のコースを「日本語Intensive A」、後期のコースを「日本語Intensive B」、そして研修コースⅡは「日本語Intensive Ⅱ」という科目名で留学生用の語学科目として単位化をしておき、2018年度には延べ16名の交換留学生が単位取得をしている。

表1は、2015年度から2018年度までの研修コースの受講者数の推移を示す。

近年の実践として、プレイスメント・テストの結果、日本語力が研修コースⅠレベルとⅡレベルの間である学生がいる場合、同様の日本語力の受講生を集め、次の学期の授業につなげられるよう、ⅠのコースをAとBに分け、ⅠAを本来の研修Ⅰ、そしてその研修Ⅰレベル以上であるが研修Ⅱレベルには達しない、または前期であるため研修コースⅡの提供がないという場合に、ⅠBを設けて提供している。残念ながら、ⅠAもⅠBもこれまでの研修コースⅠのように時間を週12コマ費すことができず、15週を経ても初級の内容を全て終了するには至らないのであるが、以前の研修コースⅠの受講生に見られた疲弊感は見られない。また、ⅠとⅡの間のレベルを提供できていることで、それまでⅠかⅡに無理に振り分けられていた、その間のレベルの学生の満足度は上がってい

ると言える。毎年受講生と指導教員とセンター教員で話し合いながら、曜日と提供可能な時間枠の中で時間数を検討し、I AとI Bのクラスを組んでいる。

2018 年度前期には、上記の理由から、研修コース I を二つに分け、交換留学生を主な対象者として週に 3 コマを 2 日、計 6 コマの入門レベルの研修コース I A を提供すると同時に、2017 年度に研修コース I A を修了した大学院生からの受講希望が多かったのを受け、I B クラスを設け、週に 1 日 3 コマ、初級後半レベルで初級の復習とそれを運用力につなげるクラスとした。前者は 4 名、後者は 6 名のクラス編成となった。

一方、2018 年度後期においては、研修コース I の 9 コマのうち 6 コマを新しく到着した交換生と大学院生向けに入門レベルの I A として提供し計 9 名が受講、また、以前の研修コース I 修了生で継続して学びたいという大学院生 1 名と新しく到着した交換留学生 1 名の 2 名を対象に週 1 回 3 コマの I B を提供した。一方、後期研修コース II の週 7 コマのコースには、初中級レベルの交換留学生が 6 名、研究生 3 名が参加した。いずれのコースでも、受講生のニーズを聞きながら対応できるように教員間で連携を取りつつ、取り組んだ。

表 1 研修コース I/II 2015 年度から 2018 年度までの受講者数の推移

年度 身分	研修コース I										研修コース II									
	2015 前期 24 期		2015 後期 25 期		2016 前期 26 期		2016 後期 27 期		2017 前期 28 期		2017 後期 29 期		2018 前期 30 期		2018 後期 31 期		2015 後期 12 期	2016 後期 13 期	2017 後期 14 期	2018 後期 15 期
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B						
研究生			1	4		1	1		1								2		3	
大学院生	1	1	2	1			5			6	1	6	2	1			2(1)			
交換留学生	2	2	1	1	3	2	1	4	1		3		7	1			5	4	8	5
教員研修生			1(1)		1(1)	1(1)	1(1)		1(1)								1(1)	1(1)		
計	3	3	5	6	4	4	8	4	3	6	4	6	9	2			6	9	8	8

■ は2018年度の受講生数、 ()は国費留学生数を示す

2. 2018年度授業概要

前期研修コース I 30 期A (週6コマ)

受講生は全員で 4 名であった。博士課程の大学院生 1 名、交換留学生は 1 セメスターのみの滞在の学生で、初修者 1 名と 1～3 か月ほどの既修者 2 名が参加しており、いずれも非常に真摯な受講態度で参加していた。博士課程の大学院生は、研究の合間を縫って参加し、途中体調不良であったり、研究発表などに集中する期間もあったが、最後まで続けて参加した。

2018年度前期は、以下の教材を使用した。

主教材：『みんなの日本語初級 I・II 第 2 版本冊』 1～30 課

副教材：『みんなの日本語初級 I・II 第 2 版 書いて覚える文型練習帳』

『みんなの日本語初級 I・II 第 2 版 標準問題集』 (いずれもスリーエーネットワーク)

前期研修コース I A では、初修者も含まれていたため仮名の表記の定着を図りながら、本課を進めていく形となったが、3 コマで 1 課を進めるスピードで、最初の 1 コマで前の課の文法と語彙の復習、新しい課の新出語彙を紹介した後、新しい文法の導入の一部、昼休みを挟んで、次の 1 コマで学ぶべき文法を紹介の後、ドリル練習で定着を図り、最後の 1 コマで応用練習と表記を取り扱った。5～7 課毎に理解度を測る復習テストを行った。応用練習では、アクティビティや国際交流センターが運営する「G-Philos」という共創学習スペースにおいて、日本語母語話者の学生 SA とコミュニケーションを図るような課題を課すようにした。非常に雰囲気や穏やかなクラスで、初修者に対しても、温かく見守り励ます姿がよく見られた。交換留学生のうち 2 名が単位取得を希望しており、学期末にプロジェクト発表のプレゼンテーションをクラス内で行った。

前期研修コースI 30 期B (週3コマ)

前年度に研修コース I A を終えた大学院生が主たる受講生である週 1 日、3 コマのコースであった。医学部からも博士課程の学生が参加し、研究発表やフィールド・ワークが入り欠席がありながらも、予習に時間も費やし、欠席した課については足りない部分は週末に復習し、翌週に備える熱心な参加者が多かった。

主教材：『みんなの日本語初級Ⅱ 第2版本冊』 31 ～ 45 課

副教材：『みんなの日本語初級Ⅱ 第2版 書いて覚える文型練習帳』

『みんなの日本語初級Ⅱ 第2版 標準問題集』（いずれもスリーエーネットワーク）

研修コース I B には、2017 年度からの受講生が多く参加したため、同じ教科書を継続して使い、研究室でも使える表現なども紹介しながら、基礎を固めていった。すでに知った者同士、ラポール形成ができており、誤答があっても明るく受け止める雰囲気があり、臆せず発言できる、とても活発なクラスであった。その中には日本語能力検定試験N3 に合格する学生も出て、他の受講者の励みとなっていた。

後期研修コース I 31 期A(週6コマ)

専門が日本語でない交換留学生が 6 名、日本語が副専攻の交換留学生が 1 名、そして初級前半レベルの大学院生 2 名が参加した。交換留学生のうち 1 名が全くの初修者、その他 4 名は自学自習で 1 か月から 3 か月ほど、1 名は 1 年の日本語学習歴があった。その学習歴 1 年の日本語副専攻の交換留学生については、本人の、基礎をしっかり固めたいという意味を確認し、参加してもらった。

主教材：『みんなの日本語初級 I・II 第2版本冊』 1 ～ 24 課

副教材：『みんなの日本語初級 I・II 第2版 書いて覚える文型練習帳』

『みんなの日本語初級 I・II 第2版 標準問題集』（いずれもスリーエーネットワーク）

週に 2 回、3 コマずつ、6 コマで進めていったが、火曜日と金曜日の 1 コマ目に前回の復習にしっかり時間をかけ、新しい語彙も動詞の形を確認するなどしながら、進めていった。5～7 課毎に復習をし、理解度を測る復習テストを行う日を設けた。専門が日本語でない交換留学生のうち、初修者の 1 名が平仮名とカタカナの習得に日々を要したこともあり、本課自体に本腰を入れるのに時間がかかってしまったようである。補講を数回入れながら、ほかの学生との進度に合わせていくよう工夫した。専門が日本語でない交換留学生のうち、3 名が 1 セメスターのみの留学できており、日本語学習に関しては集中力を欠く場面がいくらか見られた。それで、クラス内で応用練習を行う代わりに、共創学習スペース「G-フィロス」に午後常駐している日本語サポート SA を相手に行う課題を含むようにした。9 週目以降はプロジェクトをスタートさせプロジェクト準備の時間を週 30 分から 1 時間ほど設けたが、母語でもプロジェクトや研究発表の経験がない受講生も多く、授業内でも時間が十分に取れず、スケジュール通りにはなかなか進まなかった。13 週目から 14 週目になって慌てて「G-フィロス」に駆け込み、日本語 SA に原稿の日本語訳や文法チェックの助けをを求める学生も見られた。プロジェクト発表については本稿 3 に詳細を述べる。発表は研修コース II の受講生とともに成果発表という形で行った。来年度からはプロジェクトに関し、もう少し早くから取り掛かり、そして計画通り進められるよう、課題の提示を明確に行いたい。

後期研修コース II 15 期

交換留学生 5 名、研究生 3 名が参加した後期研修コース II は、前半はすでに持っている語彙や表現、文法を最大限に生かしつつ、コミュニケーション力を高めることに重きを置き、後半は 4 技能を合わせて伸ばしていく教材に切り替え、総合的に理解力を上げるよう努めた。

第 1 週～8 週

主教材：『WEEKLY J book 1 ー日本語で話す 6 週間』 凡人社

副教材：『文法が弱いあなたへ』 凡人社

：『短期集中 初級日本語文法総まとめ ポイント 20』 スリーエーネットワーク

既習文法の中でもまだ定着していないものについては、『短期集中 初級日本語文法総まとめ ポイント20』『文法が弱いあなたへ』で補い、「伝えたいこと」を自然な形で発話できるようにすることを目的とした。学んだ語彙や表現を入れて、短文レベルから談話レベルへとまとまった形で話すことができるよう、また一方で相手の「伝えたいこと」をうまく上手な聞き手として聞き、よりよいコミュニケーターとなることを目指した。

第9週～15週

主教材：『テーマ別中級までに学ぶ日本語』研究社

副教材：『アカデミック・プレゼンテーション入門』ひつじ書房

後半は中級へのブリッジ教材を用い、書き、読み、聞き、話す活動のあと、最後には意見交換を行った。その過程で日本語の総合力を伸ばすことを目指し、意見を言う場合、意見交換に割り込んではいない場合の前置き表現なども紹介した。第9週以降は週に1コマのうち1時間ほど、交換留学生はそれぞれの興味のあるテーマについてのプロジェクトの準備の時間を設け、まずはマインドマップを取り入れ、テーマを絞っていった。この研修Ⅱでの特徴的な活動としては、クラス内で、ピア活動を取り入れ、リサーチ・トピックの設定の段階から、質問項目の選定については、ピアからのフィードバックも参考に、修正を加えたり新たに新しい情報を取り入れたことである。一方、同時間、研究生に対しては、大学院入試の面接の準備のサポートを行った。

3. プロジェクト発表—成果発表

2018年度後期の最後には、研修コースⅠ、及びⅡ合同のプロジェクト発表による成果発表会を行った。研修コースⅠ、そしてⅡのいずれにも、調査型のプロジェクトを課題として与えた。テーマは日本の文化、社会に関係があることで、日頃から疑問に思っていること、興味を抱いていることなどから自由に選んでもらい、必ずインタビューまたはアンケートを実施し、日本語母語話者とのインタラクションを持つことを目的とした。

通常はプロジェクト・ワークという主の中級レベル以上の学習者を対象に取り入れられ、言語能力を養う一手段として用いられることが多いであろうが、英語教育分野では、Fried-Booth¹⁾がプロジェクトワークの具体的な実施方法を示したうえで、「初級から上級までどの段階でも実践可能」であり、「学習者の構成や興味、関心、プロジェクトワークに費やす時間数や期間など考慮次第で、様々なプロジェクトワークが可能」であると言っている。

いずれのコースでもコース半ばの段階でテーマを考え始めてもらい、第9週目にプレゼンテーションの構成や内容について概要を学んだあと、毎週30分から1時間ほどの時間を取り、課外ですべきことの提示と語彙や表現の紹介、プレゼンテーションの構成やパワーポイント作成の注意事項などについて話す時間を取った。10週目にはインタビュー調査やアンケート調査で調査協力者との間で使える表現を学び、テーマに沿った調査の目的をしっかりと定めるためにマインドマップを使用した。それからその調査の目的に合わせて、自分でトピックについての情報を集め、整理しながら、11週目までに質問項目を立てていった。情報収集はほぼ全員、初中級レベルの研修コースⅡの受講生であっても、それぞれの母語や英語でなされていたのは否めない事実であるが、この段階ではそのトピックに関わる情報を集めること、そしていろいろな見方や考え方を知ることが重要なので、どの言語かは問題ではないと考える。日本語で質問項目をまとめて、実際のインタビュー、またはアンケートを実施したが、何より、日本語回答の理解が受講生にとっては難関だったようである。そしてその分析をそのまま日本語では行えず、母語や英語と日本語を行き来しなければならず苦勞したと、研修コースⅠの受講者が感想を述べていた。

しかしアンケートやインタビューで出された回答には、予想外であったり興味深いものが多く、受講者たちは、プロジェクトを通して人の考え方を知る面白さを感じてくれたようであった。日本語使用を目的としてインタビューやアンケートを手法として使うように課したわけだが、結果的には、特にアンケート調査では、統計処理やパワーポイント作成など、人と接しない作業に費やす時間が多くなってしまった点が反省点として挙げられる。しかし、教員のみならず、共創学習スペースであるG-フィロスの日本語学習SAに助けを求めながら、日本語での

コミュニケーションを行い、意見やフィードバックを得ることでプロジェクトをより良いものにしようとする過程が学びとなっていたと言えるかもしれない。

準備をファシリテイトしていた教員側にも多くの反省点がある。限られた時間の中でも、プロジェクトについての学生の共通理解がされていたらどうか。そして十分に全員に時間が費やせず、遅れている学生へのサポートが遅れてしまったことが挙げられる。またプロジェクトのテーマが環境問題であったり、オリンピックの誘致とそのインフラについてやSNS と人との関係性など、本人が日頃より興味を持っていた分野のトピックではあるものの、内容に抽象語彙も多く、分析、考察の各段階で苦勞をしていた。教員が、質問事項の設定の段階で、ある程度、同じ分野でも内容が複雑になってしまわないような方向へと指南することが必要であったのではないかとと思われる。また発表では、考察と言いつつ、結果のみの提示で終わったものもあり、「考察」、つまりプロジェクトのテーマについて調査を基に受講者は何を感じ、何を考えたかを述べる指導がまだまだ必要であると感じている。

成果発表では、内容面、発表自体の準備不足が発表に表れているものもあった一方で、自分の調査に自信を持ち、発表の練習も重ね、ほとんどスクリプトも見ることなく、自分の伝えたいことを聴衆に語っていた伝える発表もあった。聴衆でもあった受講者たちは、レベルに関わらず、質問したりコメントを積極的に述べたりすると同時に、指導教員からの質問などには、語彙や表現ではあるものの最大限使い答えることができたのは、何より自信につながったことであろう。

4. まとめ

2018 年度前期の第30期と後期の31期の研修コース I はいずれも、指導教員とも相談の上A、Bクラスに分け、受講者の参加できる曜日とレベルに応じて組み、日本語の基礎固めを行うコースとなった。交換留学生在が主たる受講生ではあったが、そのほかの全出席がかなわなかった大学院生や研究生は、可能な範囲で学習時間を作り、熱心に取り組んでいた。これらのニーズも拾って、今後も授業提供を行ってゆきたい。

その一方で、交換留學生は学生によっては、遅刻、早退を気軽にする学生もおり、ほかの学生の進度に少々ついていけない学生もおり、彼らのモチベーションの維持、そしてクラス全体の士気の向上が教員としてもチャレンジとなった。しかし何とか最後まで全員終了するに至ったのは、非常勤の先生方のご努力あつてのことである。

コース半ばからのプロジェクトについては、アンケートやインタビュー項目の選定や精査が重要で、調査の目的に合ったもので、あまり複雑になっていないかについて、教員の指導が必要であると思われる。できるだけ早い段階からG-Philosの日本語サポートSAの力も借り、回答の理解、分析と考察に時間をかけ、最後に自分の意見を聴衆にしっかり届けてもらいたい。また発表自体の練習にも1週間ほど費やせるようなスケジュールが望ましい。

設置当時から比べると、形や時間数や内容も変化してきた日本語研修コースであるが、これからも一人でも多くの学生を受け止め、実践に役立つ日本語教育を提供できるよう、コースづくりを心掛けたい。

参考文献

1) Fried-Booth, D.L. *Project Work (2nd edition)*. 2002. Oxford University Press.

—国際交流センター奥村圭子教授 平成30年度年次報告より

2. 日本語補講

日本語補講は、国際交流センターが提供する授業科目以外の日本語教室です。主として大学院生や研究生、研究者またはその家族にも開かれたプログラムとなっています。国際交流センター江崎哲也准教授の年次報告を以下に掲載して報告します。

日本語補講

江崎 哲也

「日本語補講」は、V時限（16時30分～）以降に開講される学部・大学院の授業科目以外の日本語教室である。単位認定の対象にはならないが、主として大学院生や研究生、研究者のための生活日本語やアカデミック・ジャパニーズの運用力をつけることを目的とし、本学に在籍する留学生や研究者など日本語非母語話者に向けて開かれているプログラムである。なお、席が用意できる限りは、留学生の家族、研究者・研究員にも受講を認めている。2018年度は甲府・医学部両キャンパスで4レベル4クラスを開講し、それぞれ前期・後期ごとに週1回12週にわたって展開された。なお、受講希望者がどのクラスに出席すればよいか迷っている場合は、補講向けのレベルチェック・テスト、もしくは、「Can-do チェック『まるごと 日本のことばと文化』入門A1<かつどう>」¹により、受講クラスを決定した。

1. 2018年度前期

2018年度前期の開講クラス、及び受講者は以下の表の通りである。

表1 2018年度前期日本語補講

	月 Monday	火 Tuesday	水 Wednesday	木 Thursday	金 Friday
17:00					16:30-18:00 ろんぶん さくせい K-E 論文作成・ 口頭発表 Thesis/Essay Writing, Presentation (岡部 Okabe) @B1-324
18:00		17:30-19:00 にゅうもん K-B 入門 2 Early Beginners (井上 Inoue) @B1-323/324	18:00-19:30 ろんぶん しどう M-E 論文指導・ 医療の日本語 Thesis/Essay Writing, Japanese for Medical Purposes At least JLPT N2 level is required. (宮本 Miyamoto) かんごがっか @看護学科6F 8607		18:00-19:00 にゅうもん M-A 入門 Completely Beginners (二宮 Ninomiya) こくさいこうりゅうかいかん @国際交流 会館
19:00		19:10-20:40 しよきゅう K-D 初級 2 Beginners 2 (井上 Inoue) @B1-323/324		18:10-19:40 にゅうもん K-A 入門 1 Completely Beginners (岡部 Okabe) @B1-323/324	19:00-20:00 しよきゅう M-B 初級 Beginners (二宮 Ninomiya) こくさいこうりゅうかいかん @国際交流 会館
20:00					20:00-21:00 しよ ちゅうきゅう M-C 初中級 Pre-Intermediate (二宮 Ninomiya) こくさいこうりゅうかいかん @国際交流 会館
21:00					

甲府キャンパス Kofu Campus K- A, B, D & E

医学部キャンパス Medical School Campus M- A, B, C & E

¹ 国際交流基金 <http://marugotonihongo.jp/download/804/>

表2 2018 年度前期甲府キャンパスの各クラスの受講者数と使用テキスト

クラス名	受講者数	使用テキスト/内容
入門1	5	『まるごと 日本のことばと文化入門 A1 かつどう』 第1課～第9課
入門2	4	『まるごと 日本のことばと文化入門 A1 かつどう』 第10課～第18課
初級2	1	『まるごと 日本のことばと文化 初級1 A2 かつどう』 第10課～第18課
論文作成	5	レポート・論文の作成に必要な表現の学習、口頭発表の練習

表3 2018 年度前期医学部キャンパスの各クラスの受講者数と使用テキスト

クラス名	受講者	使用テキスト/内容
入門	3	『新装版 Basic Japanese for Students はかせ<1> 留学生の日本語初級 45 時間』(スリーエーネットワーク) 第1課～第8課
初級	1	『新装版 Basic Japanese for Students はかせ<1>, <2> 留学生の日本語初級 45 時間』(スリーエーネットワーク) 第9課～第16課
初中級	2	『新装版 Basic Japanese for Students はかせ<2> 留学生の日本語初級 45 時間』(スリーエーネットワーク) 第17課～
論文指導・医療の日本語	0	レポート・論文の作成に必要な表現の学習、口頭発表の練習、医療関連の日本語指導

2. 2018 年度後期

2018 年度後期の開講クラス、及び受講者は以下の表の通りである。

表4 2018 年度後期日本語補講

	月 Monday	火 Tuesd	水 Wednesday	木 Thursday	金 Friday
17:00				16:30-18:00 ろんぶん さくせい K-E 論文作成 Thesis/Essay Writing	
18:00	17:30-19:00 しょきゅう K-C 初級 1 Beginners 1 (三井 Mitsui) @B1-323		18:00-19:30 ろんぶん しどう M-E 論文指導・医療の日本語 Thesis/Essay Writing, Japanese for Medical Purposes At least JLPT N2 level is required. (宮本 Miyamoto) かんごがっか @看護学科6F 8607	18:10-19:40 にゅうもん K-B 入門 2 Early Beginners (大塚 Otsuka) @B1-323	17:30-19:00 にゅうもん K-A 入門 1 Completely Beginners (井上 Inoue) @B1-323
19:00					18:00-19:00 にゅうもん M-A 入門 Completely Beginners (二宮 Ninomiya) こくさいこうりゅうかいかん @国際交流 会館
20:00					19:00-20:00 しょきゅう M-B 初級 Beginners (二宮 Ninomiya) こくさいこうりゅうかいかん @国際交流 会館
21:00					20:00-21:00 しょ ちゅうきゅう M-C 初中級 Pre-Intermediate (二宮 Ninomiya) こくさいこうりゅうかいかん @国際交流 会館

甲府キャンパス Kofu Campus K- A, B, C & E

医学部キャンパス Medical School Campus M- A, B, C & E

表5 2018年度後期甲府キャンパスの各クラスの受講者数と使用テキスト

クラス名	受講者	使用テキスト/内容
入門1	16	『まるごと 日本のことばと文化入門 A1 かつどう』 第1課～第9課
入門2	16	『まるごと 日本のことばと文化入門 A1 かつどう』 第10課～第18課
初級1	6	『まるごと 日本のことばと文化 初級1 A2 かつどう』 第1課～第9課
論文作成	2	レポート・論文の作成に必要な表現の学習、口頭発表の練習

表6 2018年度後期医学部キャンパスの各クラスの受講者数と使用テキスト

クラス名	受講者数	使用テキスト/内容
入門	2	『新装版 Basic Japanese for Students はかせ〈1〉 留学生の日本語初級45時間』(スリーエーネットワーク) 第1課～第8課
初級	5	『新装版 Basic Japanese for Students はかせ〈1〉, 〈2〉 留学生の日本語初級45時間』(スリーエーネットワーク) 第9課～第16課
初中級	2	『新装版 Basic Japanese for Students はかせ〈2〉 留学生の日本語初級45時間』(スリーエーネットワーク) 第17課～
論文指導・医療の日本語	0	受講希望者がいなかったが、随時レポート・論文の作成に必要な表現の学習、口頭発表の練習、医療関連の日本語指導をすることとした。

3. 入門クラス等における使用教材の変更

2015年度後期から、入門クラス等で使用するテキストを変更した。2015年度前期まで入門から初級クラスで使用していた『20時間のキャンパス日本語』(英語版・簡体字版)²に代わり、甲府キャンパスでは『まるごと日本のことばと文化』(三修社)を、医学部キャンパスでは『新装版 Basic Japanese for Students はかせ 留学生の日本語初級45時間』(スリーエーネットワーク)を使用することとした。これは、キャンパスにより受講者のニーズが大きく異なっていること、受講者の学習スタイルが変化してきたこと等に対応するためである。また、2014年度までの甲府キャンパスでは、たとえ着実に日本語を学習していたとしても同レベルのクラスを2期・2回以上受講するケースが散見された。これはクラス間のレベルに大きな隔たりがあったためである。それを確実に解消し、入門1→入門2→初級1(後期のみ開講)→初級2(前期のみ開講)へとスムーズに上がれるよう設計した。これは JF 日本語教育スタンダードで言えば、A1前半→A1後半→A2前半へと約2年かけて進むことを意味する。

4. 受講者数の変化

表7に2014年度から2018年度の日本語補講の受講者数の推移を示す。

² 「山梨大学 戦略的プロジェクト—教育関連プロジェクト—」に、2009年度、2010年度ともに採択され、支援を受けた。
 ・2009年度プロジェクト名：「大学院留学生のための Survival Japanese テキスト作成」、プロジェクト代表者：奥村圭子
 ・2010年度プロジェクト名：「大学院留学生のための Survival Japanese テキストの改訂—生活情報、中国語による文法解説の付加と e ラーニング教材への展開に向けて—」、プロジェクト代表者：川村隆明

表7 日本語補講の受講者数の推移

	2014年度		2015年度		2016年度		2017年度		2018年度	
	前期	後期								
甲府キャンパス	18	12	13	17	17	32	28	43	15	40
医学部キャンパス	11	16	13	14	14	14	9	14	6	9
合計	29	28	26	31	31	46	37	57	21	49

甲府3クラス→| |→甲府4クラス
 医学部5クラス | |→医学部4クラス
 →|

共通テキスト→| |→異なるテキスト

2014年度までは甲府キャンパスで3クラス、医学部キャンパスで5クラスの日本語補講を開講していたが、医学部キャンパスの1クラス当たりの平均受講者数が甲府キャンパスを下回ったため、2015年度から両キャンパスとも4クラスとした。また、2015年度後期からは各キャンパスの受講者のニーズにより適合したテキストに変更し、入門期から初級までの連続性があるクラスを開講した。これらによって、日本語補講の受講者数が2014年度の57人から2017年度の94人まで増加した（約65%増）。2018年度はそれに比べるとやや減少して計70人であった。

5. まとめと今後の課題

2015年度から2018年度にかけて日本語補講に対して3つの非常に大きな変更（①両キャンパスのクラス数の変更、②使用テキストの変更、③各クラスのレベルに連続性を持たせたこと）を行ってきた。これらの改革と留学生数の増加が相まって、2017年度の日本語補講の受講者数は94人となり、過去最大となったが、2018年度はやや減少した。また、甲府キャンパスの日本語補講内では、G-フィロスを利用した実践的な練習も定期的に行われた。

日本語補講の受講者の多くは、英語で研究する学生であるが、生活に必要な日本語の習得を切望しており、一部は日本での就職も希望している。今後とも一層の日本語補講の充実を図り、大学院生や研究生などの日本語力の向上を目指して、彼らの日本での研究生生活をより充実したものにしていくことが求められる。さらに、2018年度は大学院生で口頭発表のし方や論文の書き方を学びたいといったはっきりとしたニーズを持って日本語補講を受講するケースが散見された。大学院生は学部生向けの発表のし方や論文の書き方が学べる日本語科目を履修することもできるが、そうすると全出席を求められたり、課題の提出を求められたりするため、そのような科目の履修を避けたケースも複数見られた。学部生向けの日本語科目担当者には、大学院生の受講生には柔軟に対応するよう以前から求めているが、上記のような大学院生のために、今後さらなる改革が求められる。

3. 日本語・日本事情教育

国際交流センターでは、主に学部留学生を対象として、日本語・日本語関連科目も開講しています。国際交流センター江崎哲也准教授の年次報告を以下に掲載して報告します。

日本語・日本語関連科目

江崎 哲也

主に学部留学生を対象として開講されている、国際交流センターが提供する全学共通教育科目の日本語・日本語関連科目について2018年度の報告を行う。

1. 開講科目

2018 年度開講の日本語・日本語関連科目は以下の通りである。科目名の I は前期、II は後期開講であることを指す。

前期（計 9 科目）

日本語初中級 I A、日本語初中級 I B、日本語中級 I A、日本語中級 I B、日本語中上級 I、日本語上級 I、日本語演習 A、日本事情 I、Language & Communication across Cultures

後期（計 8 科目）

日本語初中級 II A、日本語初中級 II B、日本語中級 II A、日本語中級 II B、日本語中上級 II、日本語上級 II、日本事情 II、異文化間コミュニケーション B

クラス分けは、前期・後期の履修申告の直前に行われたプレイスメントテストの結果に基づいて行った。レベルは初中級、中級、中上級、上級の 4 レベルとし、演習³は中級以上の学生を対象とした（図 1）。

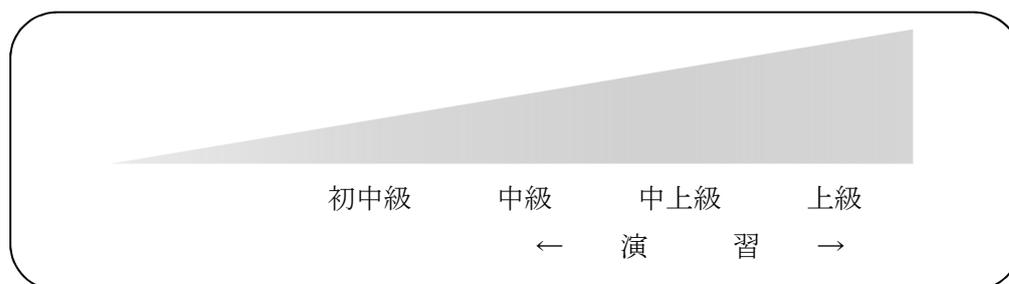


図1 日本語のレベル

各科目の受講生の学年、身分の内訳は、表 1 の通りである。なお、表中のNNSとは留学生、及び日本語を母語としない（あるいは日本語を第一言語としない）学生を指し、NSとは日本語を母語とする（あるいは日本語を第一言語とする）学生を指す。

³「日本語演習」は口頭発表能力を向上させることを目的とした科目であるが、発表のテーマについては特に与えられず、テーマ選
びから受講生自ら行わなければならないため、「中級以上、かつ学部 2 年生以上」という制限を設けている。しかしながら、他の授
業との兼ね合いで、前期に受けられる日本語科目がない場合に限り、1 年生の受講も認めている。

表1 2018年度 日本語・日本語関連科目の受講生⁴

		受講生 総数	学年・身分別にみた受講生							
			1年	2年	3年	4年	交換生	院生	研究生・ 教員研修 生等	
初中級ⅠA	NNS	7	1					5		1
初中級ⅡA	NNS	6		1				5		
初中級ⅠB	NNS	7	2					5		
初中級ⅡB	NNS	11	2					8		1
中級ⅠA	NNS	13	4	3				3		3
中級ⅡA	NNS	14			1			8		5
中級ⅠB	NNS	8						5		3
中級ⅡB	NNS	6	1					3		2
中上級Ⅰ	NNS	9	6					3		
中上級Ⅱ	NNS	7	3					4		
上級Ⅰ	NNS	5	3					2		
上級Ⅱ	NNS	4	4							
演習A	NNS	8	4	1						3
日事情Ⅰ	NNS	25	13	2				9		1
	NS	23	13	6	2	1				1
日事情Ⅱ	NNS	9	1					7		1
	NS	28	25	3						
Intercultural Understanding through Images	NNS	17	2	2				11		2
	NS	19	12	6	1					
Language & Communication across Cultures	NNS	16	1	3	2			10		
	NS	9	5	3		1				
異文化間 コミュニケーション B	NNS	12	2	1				9		
	NS	25	18	6		1				

表2 日本語・日本語関連科目の受講生数の推移

	2014年度		2015年度		2016年度		2017年度		2018年度	
	前期	後期								
日本語科目(NNS)	74	39	57	41	62	60	72	56	57	48
日本語関連科目 (NNS)	19	24	19	24	19	23	21	29	58	21
日本語関連科目 (NS)	65	55	33	48	35	49	42	49	51	53
合計	158	118	109	113	116	132	135	134	166	122

⁴ ここでいう受講生は、単位取得希望学生（学部生・交換留学生）以外の、大学院生や研究生なども含めている。

2. 2018年度の開講記録

各科目は、以下のような目的・内容で教室活動が行われた（表3参照）。右端の列は、本学のG-フィロス（グローバル共創学習室）の日本語学習サポートサービス、または英語学習サポートサービスを受けた上で課題を提出するよう促した回数を表しているが、特に断りがない限りは日本語学習サポートサービスを受けるよう指示した回数を示している。これは例えば、作文の宿題を課す際に、まず受講生が自分で書き、その後G-フィロスに課題を持って行き、そこにいる日本語サポートSA（Student Assistant）にチェックしてもらってから課題を提出するように指示するということである。この取り組みを始めてから、受講生が課題に割く時間が少しずつ増加しているようである。さらにそれによって留学生の日本語力の強化にもつながっているようである。

表3 日本語・日本語関連科目の概要

授業タイトル (主な内容)	担当	主な使用テキスト、参考書	内容					G-フィロスを利用して課題を提出するよう促した課題の数
			読む	書く	聞く	話す	文法	
初中級ⅠA (会話と文法)	仲本	『J.Bridge to Intermediate Japanese』 (凡人社)	△	△	◎	◎	○	3
初中級ⅡA (文法の復習と会話)	奥村	『J.Bridge to Intermediate Japanese』 (凡人社)	△	○	◎	◎	○	4
初中級ⅠB (作文)	江崎	『大学・大学院 留学生の日本語②作文編』(アルク)	△	◎	△	△	○	10
初中級ⅡB (少し専門的な文章の読み方)	江崎	『改訂版大学・大学院 留学生の日本語 ①読解編』 (アルク)	◎	△	△	△	○	4
中級ⅠA (読解)	江崎	『改訂版大学・大学院 留学生の日本語 ③論文読解編』 (アルク)	◎	△	△	△	○	5
中級ⅡA (読解、意見のまとめ方)	伊藤	『中・上級日本語教科書 日本への招待 テキスト』 (東京大学出版会; 第2版)	◎	○	△	○	○	3
中級ⅠB (場面や相手に沿った適切な話し方)	伊藤	『日本語上級話者への道—きちんと伝える技術と表現』(スリーエーネットワーク)	△	○	◎	◎	○	3
中級ⅡB (作文)	伊藤	『小論文への12のステップ—中級日本語学習者対象』(スリーエーネットワーク)	△	◎	△	△	○	10
中上級Ⅰ	奥村	『中上級学習者のための』	△	△	◎	◎	△	2

(会話・聴解・発表)		日本語会話』(スリーエーネットワーク)						
中上級Ⅱ (論理的な文章の書き方)	仲本	・『大学・大学院 留学生の日本語④論文作成編』(アルク)	○	◎	△	△	○	4
上級Ⅰ (レポート・論文の書き方)	江崎	『論文ワークブック』(くろしお出版)	△	◎	△	△	○	5
上級Ⅱ (発表の仕方と、新聞記事などの資料の読み方)	江崎	『トピックによる日本語総合演習 上級』、『トピックによる日本語総合演習 上級用資料集』(スリーエーネットワーク)	○	○	◎	◎	△	3
演習A (発表の仕方)	江崎	『大学生のための日本語—効果的学習のために』(産業能率大学出版部)	△	△	○	◎	△	3
日本事情Ⅰ	伊藤	『日本の風俗起源がよくわかる本』(大和書房)	日本人の学生と一緒に、日本の文化や日本事情を勉強する授業。文化や社会について学びながら、日本語力を伸ばす。テーマに基づくグループ・ディスカッションを行い、各国・地域や家庭の習慣、文化について紹介しあう。 (ⅠとⅡは別内容)					10 (日本語非母語話者のみ)
日本事情Ⅱ	伊藤	『日本の風俗起源がよくわかる本』(大和書房)						10 (日本語非母語話者のみ)
Intercultural Understanding through Images	奥村ほか	- (授業内指示、自主作成教材)	Students will be given an opportunity to both reflect on their own cultures and gain an understanding of other cultures through interaction with classmates. Through this interaction, students will recognize the limits of their own cultural frames and will be exposed to diverse systems of value and logic.					1 (英語学習サポート)

Language & Communication across Cultures	奥村	- (授業内指示、自主作成教材)	This class aims to equip students to understand the role of language and communication across cultures highlighting the importance of intercultural communication and language. In the class consisting of both international and Japanese students, all the interactive activities are conducted in English.	4 (英語学習サポート)
異文化間コミュニケーション	奥村	- (授業内指示、自主作成教材)	日本人の学生と一緒に、自分の文化以外の文化をどう理解するか、その文化をもつ人とどのようにコミュニケーションをするかを勉強する授業。	-

*「内容」の項目の記号は、◎：よく勉強する(よく取り上げる/扱う)、○：勉強する(取り上げる/扱う)、△：あまり勉強しない(あまり取り上げない/扱わない)ということを表す。

3. まとめと今後の課題

2018年度の日本語・日本語関連科目の日本語非母語話者の総受講生数は184人で、前年度比3%増であった。2015年度から2018年度にかけて受講生が増加したのは、留学生に対して日本語科目の重要性を繰り返してきたことや、留学生数の増加などが要因として考えられる。

2018年度は2017年度に引き続き、13科目ある日本語科目すべてに「G-フィロス」の利用を推奨・義務付けた。それによって、日本語学習の時間が増加して、留学生の日本語力の強化にもつながったようである。また、各授業の課題以外でも日本語サポートSAを活用する事例が見られ、受講生がG-フィロスを積極的に利用する姿が見られた。日本語母語話者と日本語非母語話者の交流の場を広げるためにも、今後も積極的に課題の一部をG-フィロスで行うような仕組みを取り入れていきたい。

また、日本語関連科目(「日本事情」、「異文化間コミュニケーション」、「Language and Communication across Cultures」)も、日本語非母語話者、日本語母語話者の受講生数がともに増加した。入学当初から異文化に興味を持っている学生だけでなく、G-フィロス等学内で留学生に接してから、あるいは留学に興味を持ってからこれらの授業の必要性に気付く学生もいるようである。これらの科目の履修の重要性を訴えつづけ、今後も共修型授業を通して、グローバル人材育成のためにも学生の異文化理解力を高めていき、留学などにもつなげていきたい。

4. 留学生支援・相談・文化交流

国際交流センターでは、留学生の生活・就学に関する相談・指導を行うだけでなく、文化体験・交流や講演会等、留学生にとって有益な行事を提供することによって、留学生が日本での生活に馴染み、学業に取り組める環境を整えるための支援も行っています。これら留学生支援・相談、文化交流について、国際交流センター伊藤孝恵准教授の年次報告に写真を加えて掲載し、報告します。

留学生支援・相談、文化交流について

伊藤 孝恵

I. 指導・相談

山梨大学における留学生のための相談体制として、国際交流センターに留学生相談室が設置されているほか、国際交流センターの各教員がそれぞれオフィス・アワーを設けている。国際交流センターでは、留学生のみならず、海外留学や国際交流、G-フィロスに関心のある学生や、日本語教育に関する相談で訪れる学生にも対応している。

本稿では、そのうち、2018年度に留学生相談室で対応した主だった指導・相談、及び国際交流センターや国際部の一部支援行事や交流行事について報告する。

1. 生活、修学、進路相談

2018年度も、生活面では在留資格や諸手続きに関する質問、大学でのちょっとした疑問のために、相談室のドアをノックする留学生が時折訪れた。修学に関しては、成績不振や苦手科目の自力での克服が難しいと思われる学部留学生に、クラス担任教員からの申請の上チューターを配置し、留学生相談室でも中間試験、期末試験後などに面談を行った。寝坊して授業への遅刻や欠席が目立つ、夜なかなか眠れないなどの症状がある場合は、生活指導や保健管理センターの紹介もしたが、幸いどの留学生もチューター学生からの学習支援が大きな助けとなり、再び成績不振に陥ることなどはなかったようである。

ほかに、留年が続く留学生たちへも、年間を通じて継続的に面談を行ってきたが、個々のケースによって状況が異なる上、容易ならざる問題も抱えており、一筋縄では解決できない。面談を重ねた結果、留学を断念するに至った者もいたが、留学経験をステップに母国で新たな道を切り開こうと前向きに捉えていたのはなによりだったと思う。家庭の事情で帰国か休学か留学継続か迷う留学生や、専攻が合わず留学が続けられないと泣いて訴える留学生、研究室に馴染めず適応障害を起こした留学生もいたが、学科の先生方や校医と話し合いを重ね、学生にとってよりよい対応をとることができた。

就職活動中の修士1年、学部3年の留学生の個別相談や進路相談は、12月以降増え始め、2月3月は、エントリーシートをみてほしいという留学生の予約でいっぱいになる。ただ、その多くが、自己分析や業界・企業研究が深掘りできておらず、エントリーシートの添削は、同時に相談担当教員との自己分析や企業研究などにもなっている。個人相談の前段階で、ガイダンスやセミナーなどを通して、自分のキャリアや就職に対する意識啓発や準備を行った上で、エントリーシートの相談につなげられるとより効果的・能率的だと思われる。今後もさらにそうしたセミナー等による支援・指導の充実を図っていきたい。

2. 新入生個別面談

4月の慌ただしさが落ち着いた頃の5月の大型連休明けから、学部新入留学生を対象に、毎年個人面談を実施している。大学生活の早い時期に、一度は留学生相談室を訪れてもらうことで、相談室を知ってもらい、相談担当教員と少しでも話しやすい関係づくりを行う意図がある。また、入学当初の不安な気持ちや問題があれば、話してリラックスしてもらい、学内の関係部署を紹介するなどして、スムーズに大学生活に慣れるよう早めの対応

を心掛けている。この段階では、まだ親しい友人ができず、クラスに馴染めるか友だちができるかという不安を抱えた学生が多い。個人面談で気になる留学生には、その後も様子を確認するメールを送ったり、面談を継続するなどしている。日本人学生と友だちになりたいという留学生がいる一方で、留学生同士の付き合いで十分だとする留学生や、他者との関係に距離を置きたい留学生もいる。個々の性格やニーズを尊重しながら、留学生の大学での孤立化を防ぎ、充実した留学生活を送れる手助けとはなにか、彼らと話し合い模索しているところである。

II . 支援

1. 留学生ガイダンス(前期:4月3日 後期:9月21日)

国際交流センターでは、例年通り、前期と後期の初めに新入留学生を対象にガイダンスを開き、その後、在学生も含めて日本語プレイズメント・テストと、新入生を連れたキャンパス・ツアーを実施した。ガイダンスでは、これまでと同様、日本語・日本語関連科目の履修や、国際交流センターの指導・相談体制、国際企画課より在留資格や一時帰国の際などの諸手続きの説明を行った。また、ごみの分別や交通規則の案内、地震などの防災対策に関するパンフレット等の配布とともに、災害に備える心構えと準備を訴えた。また、日本語プレイズメント・テスト前には、新入生、在学生に対して、悪質な勧誘に対する注意喚起を行い、自転車、バイク、自動車の使用状況と保険への加入を確認するアンケート、ストレスチェックシートを配布し、回答してもらった。回収したストレスチェックシートは、留学生相談担当教員が確認し、必要に応じて個別面談を行った。

2. 留学生チューター制度

入学後一年目の大学院生や研究生の留学生、及び交換留学生に対し、指導教員の指導の下で、主に同じ研究室の上級生がチューターとして、研究や勉学、日常生活における個別の相談・補助を行っている。前期は、5月17日、18日、後期は10月30日のそれぞれ昼休みに説明会を開き、国際企画課の職員からの手続きに関する説明の後、留学生相談室より、活動方法や活動内容、活動する際の留意点などを、資料を基に説明した。

また、成績不振や勉学に不安のある学部2年次以上の留学生に対しては、クラス担任の教員と面談の上、同学年・同学科の学生をチューターとして配置し、当該留学生にとって難しい授業の勉強や課題作成の補助などをしてもらっている。

チューターによる学習支援の対象となった2年次以上の留学生には、各学期初めに、留学生との個別面談で修学状況を確認し、留学生相談室で留学生とそのチューターと話し合いながら、その留学生に合った支援を一緒に考えてもらっている。

また、全チューターには、毎月謝金申請のための報告以外に、メールによる活動報告も行ってもらっている。これには、チューター活動が円滑に行われているかの確認とともに、留学生の様子を知らせてもらい、問題の予防や早期発見・解決につなげたい意図もある。また、チューター活動の中での問題をチューター学生自身が抱え込まないよう、チューター学生への指導・支援という意味もある。送られてきたメールには、コメントを返し、今後のチューター活動に役立ててもらおうようにしている。メールでの活動報告事項は、以下の通りである。

1. 当月に何回/ 何時間、チューター活動をしましたか
2. 主にどのような活動をしましたか
3. 担当留学生の様子はどうでしたか (生活面/ 勉学・研究面/ 人間関係/ 健康面)
4. 担当留学生の様子について、なにか気になることがありましたか
5. チューター活動に関する質問や、困っていることなどがあったら書いてください

活動報告から、各チューターの間には、活動内容や時間数、留学生への関わり方に個人差が見られた。定期的

に実験の補助をした人や、留学生のゼミ発表や課題提出の前に手伝った人、毎日研究室で顔を合わせていても、チューターとしては特別なことをしていないという人もいた。また、研究室が異なるため、ほとんど様子を見守る程度だったという人や、分からないことなどあれば連絡するよう言ったが留学生から連絡がなかったのが活動しなかったという人、チューター自身が教育実習などで忙しく、留学生と会えなかったという人もいた。大学院生に関しては、研究室での支援や交流が可能な状況が見えてきたことから、今後、チューター配置を見直すことを検討したい。

3. 学部新入留学生に対するボランティア活動(交流パートナー制度)

学部一年次の留学生には、従来からのチューターに替わり、自薦、あるいはクラス担任の先生の推薦により、同じクラスメイトの日本人学生数名が、留学生の交流パートナーとなっている。留学生のクラス内での仲間づくり・居場所づくりと学生間の協働学習の促進が目的である。登録した日本人学生は、要件を満たせば、自発的教養科目(ボランティア活動)の1~2単位を取得できる。

5月16日の昼休みの説明会に先立ち、5月12、13日には、お互いの親睦を深める目的で山中湖畔にて交流合宿を行った。学科を中心とした小さなグループに分かれて、忍野八海を散策。夜は、散策中に撮った写真をもとに、最もインスタ映えする写真を競うコンテストを開き、大いに盛り上がった。帰りのバスの中は和気あいあいとした雰囲気に包まれ、皆すっかり打ち解けた様子であったが、この合宿で築いた交友関係をそれ以降の大学生活においても維持・継続できるかどうかは個人差・グループ差が大きく、留学生と日本人学生が交友関係を築く難しさを改めて感じた。



写真コンテスト



富士山を背景に

4. 国際交流会館

甲府国際交流会館では、前期は4月18日、後期は10月25日のそれぞれ18時半より、新入居者を中心にオリエンテーションを行った。オリエンテーションでは、まず、総合情報戦略部情報システム課の職員の方から、違法ソフトのダウンロードやファイル交換ソフトWinnyなどの使用に対する注意があった。その後、会館チューター学生2名から、会館の共有スペースの使い方やごみ出しの方法、緊急連絡先や避難場所、諸経費の支払い方法等について、日本語と英語が併記されたパワーポイントを使って説明がされた。オリエンテーションの後は、会館チューター企画の「おにぎりパーティ」で親睦を深め合った。

甲府甲斐路分館においても、前期は5月10日、後期は11月6日のそれぞれ昼休みに、関係教職員と居住者との間で、緊急連絡先や避難場所、経費の支払い方法、ゴミの分別などについて確認した。

2018年度は、キッチンや洗濯室、ホールなどの共有スペースの使用上の大きな問題や、近隣からの苦情もなかった。留学生同士で送別会を開くなど、会館チューターを中心に居住者同士仲良く生活できたようである。

5. 留学生のための防災教室(6月7日)

6月7日のV限に、(公財)山梨県国際交流協会と甲府市の多文化共生事業の一環として、本学国際交流センターとの共同主催による「留学生のための『防災教室』」を開催した。

最初に、山梨県国際交流協会事務局長より挨拶をいただいた後、東キャンパス駐車場にて、地震体験車にて震度7の地震を体験。その後、場所を教室に移し、甲府市防災指導課の方より、非常食の炊き出しの一例として、備蓄食材のアルファ米の作り方の実演が披露され、出席した留学生にも配布された。また、同課指導員の方より、「災害に備える」というテーマで、スライドを見ながら、地震のしくみや災害への備え、避難方法、災害情報の入手方法について学んだ。

これまでは、災害に関する知識や情報は、多言語に翻訳された冊子として配布されていたが、携帯電話やスマートフォンのアプリでも入手できるようになったとのことで、大学でも広く留学生に周知したいと思う。

6. 留学生のための防犯講話(10月25日)

留学生が、日本で安全・安心に暮らせるよう、10月25日、山梨県警察本部の警察官を招き、留学生のための防犯講話を2018年度も行い、46名の留学生が参加した。警察の方がパワーポイントを使って説明して下さった後、国際交流センターの教員が英語で通訳し、留学生が十分理解できるよう努めた。

空き巣や自転車・バイクの盗難、痴漢、危険ドラッグ、交通ルールと自動車・自転車保険、警察への通報、就労制限と在留カード、ハザードマップの確認や災害への日頃の備え、Jアラートの紹介といった多岐に亘る内容について、一通り説明があった。講話の最後には警察より、反射板などの防犯グッズが留学生一人一人に手渡され、留学生が日本で安全・安心に暮らす上での心構えが留学生に伝えられた。



防犯講話の様子



ハザードマップを示して

7. 留学生の就職支援

大学・大学院を卒業・修了後に日本での就職を希望・検討している留学生のために、毎年、キャリアセンターからの協力を得て、「留学生のための就職ガイダンス」を行っている。2018年度は7月6日の昼休みに開催し、修士1年生を中心に11名の留学生が参加した。

ガイダンスの最初に、留学生一人一人が就職活動に関する疑問や不安を述べ、ガイダンスではそれらに応えながら、日本の就職活動の流れやポイント、留意点などの説明がされた。

ガイダンスの最後には、留学生からの質問を受けつける時間を設けると、「就職を迷っているが、インターンシップは参加した方がよいか」「何社ぐらい受けたらいいか」などの多くの質問が出て、留学生の就職活動に対する関心の高さが窺えた。

そして、2019年2月5日には、留学生相談室主催の「留学生のための就職セミナー」を開催し、主に自分の強みを見つけるワークを中心に、7名の留学生が自己理解を深める活動に取り組んだ。

このようなガイダンスやセミナーに参加した留学生には、キャリアセンターの個別相談を紹介するだけでなく、留学生相談室でもキャリアコンサルタントの資格を有した相談担当の教員が、一人一人に対し、エントリーシートの添削を行いながら、留学生の自己理解や業界・企業理解を深める手助けをしている。その結果、このようなセミナーや個別相談に参加した留学生は、志望企業に就職が決まった。今後は、キャリアセンターや留学生相談室が行うガイダンスやセミナー、個別相談により多くの留学生に参加してもらえるようにすることが課題である。

Ⅲ．文化交流

1. ホーム・ステイ/ホーム・ビジット（6月23、24日）

2018年度は、留学生9名、ホストファミリー8組が参加し、このうち、ホーム・ステイは2組、ホーム・ビジットは6組であった。

留学生とホストそれぞれの希望のほか、アレルギーや宗教上などの留意点、喫煙やペットの有無についても双方に申し込み時点で申告してもらい、それらを総合的に考慮して、マッチングを行った。

数日前には、学生に向けオリエンテーションを行い、服装や持ち物、マナーなど留意点を説明した。ホストファミリーの前でのスマホの使い過ぎについては、以前ホストファミリーからのアンケートで指摘があったことから、オリエンテーションで注意を呼び掛けた。当日は、ホストファミリーと一緒に料理を作ったり、普段留学生の足ではなかなか訪れる機会の少ない場所に車で連れて行っていただいたりと、それぞれ交流を楽しむことができたようである。

このホーム・ステイ/ホーム・ビジットの後も、連絡を取り合い、交流が続いているホストファミリー・留学生がいることは大変喜ばしく、今後も交流が広がっていくことを望んでいる。

2. 留学生の現地見学旅行(9月19、20日)

行先の希望を留学生にアンケート調査した結果、長野と決まり、同行する日本人学生4名と教職員2名を含め、計30名の一泊二日の長野への旅となった。

一日目の午前中は、日本一広大なわさび田として知られる大王わさび農場を見学し、昼食後は善光寺と小諸城址・懐古園の散策を楽しんだ後、その夜は佐久市のホテルに宿泊した。翌二日目は、長和町にある立岩和紙の里にて、和紙を使った団扇や葉書作りに挑戦。和紙の魅力を体験できるひと時となった。松本市のみそ工場を見学し昼食をとった後は、松本城に立ち寄り、「烏城」ともいわれる白と黒の城を仰ぎ見ながら、造られた当時の戦国時代にしばし思いを馳せた。

留学生にとって、日本の文化に親しむ思い出深い旅となったと思う。



善光寺にて

3. 地域交流餅つき会(11月17日)

甲府国際交流会館の前庭にて、同館で暮らす留学生と、会館のある岩窪地域の自治会の方々との文化交流会を開催。2018年度で15回目となる本行事は、年末の恒例行事のようになっており、樋口甲府市長も挨拶に駆けつけてくださった。留学生からは、アメリカ、ドイツ、タイ、フランス、モンゴル、イギリス、マレーシア、計8か国のお国料理が、留学生手ずから振舞われ、「おいしいね」「何が入っているの？」など、参加者の間で食を通じた交流があちらこちらで見られた。

そして、餅つきでは、自治会の方々の手ほどきを受けながら、「よいしょ！よいしょ！」の掛け声の中、留学生も一人一人杵を振るい、つきたてのお餅を美味しく頬張っていた。会の最後には、留学生による歌と、自治会の方々による獅子舞が、それぞれ披露され、暖かな陽だまりの中、和やかな心温まる集いとなった。



留学生のお国料理



留学生も杵をふるって

4. 留学生の華道体験(11月2日)

大学祭の開催時期に合わせて、2018年度も華道部の協力を得て、留学生が華道を体験する機会を設けた。中国、タイ、マレーシア、ドイツ、アメリカ、オーストラリアの留学生21名が参加し、華道部顧問の雨宮先生の説明・指導の下、華道部員の学生に手伝ってもらいながら、銘々花材と向き合い、思い思いに活かしていた。活かした作品は、大学祭の期間中展示し、多くの来場者に見てもらった。



華道体験の様子

—国際交流センター伊藤孝恵准教授 平成30年度年次報告より

5. その他留学生支援のための行事等

ここでは、前項までの伊藤准教授からの年次報告に含まれなかったその他の留学生支援のための行事について報告します。

(1) 甲府国際交流会館における火災訓練：平成30年5月17日（木）

芙蓉寮と合同で国際交流会館の火災訓練を実施しました。

今年度は国際交流会館入居者30名、芙蓉寮入居者78名、職員8名、指導員2名の計118名での実施となりました。

訓練では火災を想定して寮の居室から緊急避難場所である芙蓉寮中庭へ避難し、点呼の後、消火器と放水ポンプによる消火訓練を実施しました。地震をはじめ自然災害の多い日本ならではの、実践的な訓練を体験することができました。



消火器による消火訓練体験



放水ポンプによる消火訓練

(2) 平成 30 年度 学長主催 山梨大学外国人留学生懇談会を開催：平成 30 年 12 月 4 日（火）

甲府キャンパスにおいて「平成 30 年度学長主催山梨大学外国人留学生懇談会」を開催し、外国人留学生・研究者とご家族、県内の留学生支援組織の関係者や教職員等約 170 名が参加しました。

これは、本学の外国人留学生・研究者やご家族と、日頃からご支援をいただいている自治体や支援組織の皆様等を交え懇談することで、相互理解を深めることを目的に毎年行っているものです。

冒頭、主催者である島田眞路学長による歓迎の挨拶の後、ご来賓を代表し樋口雄一甲府市長及び田中久雄中央市長からご祝辞を頂戴し、本学から留学生 2 名がお礼の言葉を述べました。

懇談会ではハラルに配慮した料理も振舞われ、歓談中、余興としてドイツ出身の留学生が母国の伝統的なクリスマスソングを、また、本学留学生宿舎である国際交流会館の入居者が合唱を披露し、会場は大いに盛り上がりました。



挨拶する島田学長



挨拶する樋口甲府市長



挨拶する田中中央市長



懇談会の様子



クリスマスソングを披露するドイツ出身留学生



国際交流会館入居学生による合唱



参加者による記念写真

III. 国際化教育

国際的な環境で勉強できるキャンパスの整備に向け、国際交流センターでは「G-フィロス（グローバル共創学習室）」を中心に、日本人学生と外国人留学生が共に学び、異文化理解・交流を行う機会を数多く設けています。

G-フィロス

グローバル共創学習室『G-フィロス』とは、国際的なコミュニケーションを育成する場として、異文化理解や語学学習を通じ、学生間で互いに学び合う学習環境のことであります。日常的には、英語に限らず語学の勉強を学生同士でお互いにサポートするようなサービスを提供し、それ以外にも異文化交流イベントを開催するなどして、学生の学び合う環境を整えています。

1. 交流イベント

G-フィロスでは、キャンパスのグローバル化を促進するために、学生や教職員と留学生が交流する場を設けています。主に文化紹介シリーズのイベントや、毎年恒例の行事になりつつある夏祭りやホリデーパーティなど、誰もが気軽に参加し異文化交流できるイベントを1年を通して開催しています。

(1) 異文化交流イベント「World Culture Cafe」：平成30年5月10日（木）

甲府キャンパスにおいて、国際交流センター主催イベント「World Culture Cafe」を開催し、留学生・日本人学生・教職員ら約50名が参加しました。

このイベントは、学生ら参加者が互いに親交を深めるとともに、多文化への理解を深めることを目的に行われました。

イベントでは、中国・ドイツ・ベトナム・マレーシア出身の留学生が、出身国の文化や風土を紹介したほか、紹介各国にちなんだ料理やドリンクが振る舞われました。参加者は、食事を楽しみながら懇談し、母国の文化を紹介し合うなど、にぎやかなひと時となりました。



中国出身留学生による紹介



ドイツ出身留学生による紹介



食事を楽しむ参加者

(2) 夏のイベント SUMMER BASH!：平成30年7月11日（水）

夏祭り「Summer Bash!」が開催され、留学生・日本人学生・教職員ら約100名が参加しました。

このイベントには、夏季休暇中に約1ヵ月間の短期研修で訪れている留学生約30名も加わりました。この日は、留学生や日本人学生が民族衣装で記念撮影を行ったり、うちわ作りや屋外での流しそうめん、水風船のヨーヨー釣りが行われました。

多くの学生が普段と違う浴衣姿で、日本の夏の雰囲気を楽しんでいる様子でした。



浴衣や民族衣装に身を包んだ参加者



流しそうめんを楽しむ参加者



学生たちの短冊が飾られた七夕飾り

(3) HOLIDAY PARTY : 平成 30 年 12 月 11 日 (火)

毎年恒例のホリデーパーティーを開催し、留学生や日本人学生、教職員ら約 70 名が参加しました。世界各国のホリデーシーズンの文化紹介においては、今年はイギリス、タイ、中国、ドイツ、マレーシア出身の留学生が発表を行いました。

その他に英語を使ったゲームが行われ、参加者は異文化交流を楽しんでいる様子でした。



イベントチラシ



参加者集合写真

(4) NEW YEAR WORLD FOOD FESTIVAL : 平成 31 年 1 月 8 日 (火)

世界各国の正月文化を紹介し合い食事を楽しむイベント “New Year World Food Festival” を開催し、学生と教職員ら約 60 名が参加しました。

日本のお汁粉の他に、3 カ国 (韓国、ドイツ、マレーシア) の母国料理を試食できるということで、留学生の参加が目立っていました。

世界各国の年末年始の過ごし方や、食文化について理解する良い機会になったようです。



日本語 SA によるお正月の説明



各国の料理やお汁粉を楽しむ参加者



2. Student Assistants (SA) の活動

Student Assistants (SA) は、日本人学生及び留学生を短期雇用する形で運営しており、日本語・英語その他の言語のサポートを行っているほか、前項で紹介した異文化交流イベントの際などに中心的役割を担っています。

以下に、日本語サポート SA と留学生 SA の 2 つの SA の活動について報告します。

(1) 日本語サポート SA

日本人学生及び日本語が堪能な留学生で行っています。SA を勤める学生が指定の時間内つねに在席しており、留学生のレポートやその他課題の日本語チェック、日本語能力検定試験等の勉強サポートなど、日本語を学ぶ留学生がいつでも気軽に、無料でサポートを受ける事が出来るようになっています。日本語 SA によるサポートは、日本語・日本語関連科目の中でも活用されており、留学生の日本語学習において非常に大きな役割を担うようになりました。日本語そのものの学習サポートだけではなく、SA を勤める学生の学問的な専門分野も幅広く、日本語で専門分野を学ぶ留学生の大きな助けとなっています。そのほか、日本文化体験イベントや G-フィロス Facebook ページへの投稿なども、日本語 SA が中心となって行っています。サポート

の受けられる時間は前期・後期ごとに G-フィロスタイムスケジュールを掲示して利用者に知らせています。

(2) 留学生 SA

留学生 SA は、イングリッシュ・カフェ、イングリッシュ・サポート、諸外国語カフェを担当しています。イングリッシュ・カフェは昼休みの時間帯に開催しており、日本人・留学生問わず、英語学習を目的とした多くの学生が、昼休みを利用して気軽に留学生との会話・交流を楽しめる形態となっています。イングリッシュ・サポートは、主に V 限目・VI 限目の時間帯に行っており、日本語サポート SA の活動と同様、英会話を中心に、利用学生の英語学習における様々なサポートを提供しています。

諸外国語カフェについては、「〇〇（国名）カフェ」という形で、母国の文化紹介をしながら言語も学んでもらうという形式になっており、カフェで行う活動の内容は SA を勤める留学生が自ら発案して行っています。その年、その学期に SA を勤める留学生の母国語で開催されており、平成 30 年度は、前期に中国語とドイツ語、ベトナム語、マレー語、後期に韓国語と中国語が行われました。



イングリッシュ・カフェの様子

3. 英語学習・留学アドバイザーによるサポート

英語学習・留学アドバイザーは、常時 2 名体制をとって学生の英語学習と海外留学のサポートを行っています。英語学習・留学に関して個別相談を受けるほか、先に紹介した留学生 SA のイングリッシュ・カフェやイングリッシュ・サポートを SA と共に運営しています。プロのアドバイザーの指導や相談を、本学学生であれば無料で受けられることができるとあって好評で、導入した平成 26 年度以降、利用者は年々増加傾向にあり、安定的な運用を行っています。

平成 30 年度は、アドバイザーが主催する様々な英語学習・留学関連イベントが数多く行われましたので、これらイベントについて以下に報告していきます。

(1) TOEIC 関連セミナー：平成 30 年 4 月 18 日（水）、25 日（水）

「スタートダッシュ TOEIC」セミナーおよび「TOEIC スコアアップ」セミナー&ハーフ模試が開催されました。

新入生を中心に約 60 名が参加し、TOEIC に関する疑問や悩みを解決できるように、TOEIC の実施団体 (IIBC) の担当者と、英語学習アドバイザーによる初心者向けの解説が行われました。

<参加者の声>

「今年開催される TOEIC の対策講座に関心を持った」

「学内 TOEIC 受検料キャッシュバック制度を活用できるように、まず英語自律学習ポイントカードのポイントが 30 ポイント貯めたい」

「留学生と英会話レッスンができる English Support に行ってみたいと思う」

(2) 「春のイベント！留学生と英会話！」：平成30年5月11日（金）

甲府キャンパス工業会館の Active Learning Room にて「春のイベント！留学生と英会話！」が開催されました。

本イベントは、英語への苦手意識が強く G-フィロスに近づきづらいと思っている学生でも、気軽に国際交流を楽しんでもらえるように企画しました。

ボランティアの留学生 5 名を除き初参加者を多く含む日本人学生約 25 名が参加し、ゲームやアクティビティを通し簡単な英会話で交流を楽しんでいる様子でした。

イベント後のアンケートには、「今回のようなイベントならまた参加したい」「留学生と話せてうれしい」「今後は積極的に G-フィロスの活動に参加したい」など前向きな感想が寄せられました。



アクティビティの様子



交流を楽しむ参加者

(3) 英語発音ブラッシュアップセミナー：平成30年7月4日（水）

英語の発音強化を図るセミナーが開催され、20 名が参加しました。

発音に自信がつくとスピーキング力が上がり、自分が発音できる音は聞きやすくなりリスニング力が上がります。つまり、発音力を鍛えることは語学力を飛躍的に伸ばすことに直結します。

参加学生たちは、英語学習アドバイザーに倣ってたくさん口を動かし、照れながら「ネイティブっぽい発音」を繰り返し練習していました。

(4) 夏季休暇イングリッシュ・カフェ：平成30年9月10日（月）～28日（金）

夏季休暇中の9月10日（月）～28日（金）の計13日間、英語学習アドバイザーによるイングリッシュ・カフェを開催しました。

これまでに G-フィロスを訪れたことがなかった学生や、本学の海外研修かプログラムを終了した学生などが参加しました。

最終日近くには、10月入学の交換留学生も加わり賑わっていました。

(5) TOEIC(R)E-ラーニングハーフ模試セミナー：平成30年10月10日（水）

E-ラーニングによる TOEIC(R) L&R のハーフ模試を開催し、約 40 名が参加しました。

就職活動に備えてスコアアップを目指す学生や、苦手パートの把握、弱点对策のために参加する学生が目立ちました。

学生にとっては参加しやすく、TOEIC の問題形式を理解する良い機会になったようです。

(6) 英会話セミナー「会話で使える『とっさの一言』」を開催：平成30年11月7日（水）

英会話セミナー「会話で使える『とっさの一言』」を開催し、約 30 名の学生と職員が参加しました。

参加者は多くの便利なフレーズをゲームを通して学びました。すぐにでも英会話で使いたい表現ばかりでも役に立ったとの声が多くあがりました。

また、参加者の多くは講義後にG-フィロスへ移動し、留学生たちと交流ができる English Support を体験しました。今までG-フィロスを利用したことが無かった学生にとって、G-フィロスを知る良いきっかけになったようです。

アドバイザー紹介チラシ

医学部キャンパスでの取り組み

国際交流センターは、山梨大学甲府キャンパスに設置されていますが、10 kmほど離れた医学部キャンパスには分室を設置し、教授1名を配置して、医学部学生の英語学習サポートや留学生支援などを行っています。その取組について、国際交流センター医学部分室・宮本和子教授の年次報告を掲載して報告します。

2018年度 医学部の留学生に対する英語学習支援や国際交流に関する取り組み

国際交流センター医学部分室 宮本和子

1. 英語アドバイザーによる医学部英語サポート・英語講座報告

1) 前期

2時限目を英語相談、昼休み(12:20~13:00)をEnglish Caféとして実施した。4月13日(金)は周知イベントとして、「English Café スペシャル ひとこと英会話でカンボジアコーヒーを楽しもう」を実施し、約50人の参加を得た。初回は4月20日(金)であった。英語相談は医学部学生の必修科目授業と重なることが多く、通常1~2名の参加で、0名のこともあった。教員の参加も見られた。昼休みのEnglish Caféは2~6名程度の参加者であった。参加者の多くが一定以上の英会話能力を持っており、短期~長期の留学経験者も多く含まれていた。初級レベルの学生には入りにくいと感じさせてしまう可能性がある。英語相談は分室教員のゼミ学生がカンボジアでの卒業研究と統合実習を実施する準備のために7~9月にアドバイザーから支援をいただくなど、特に英語を必要とする学生の支援としても有効であった。

2) 後期

前期同様、2時限目を英語相談、昼休み(12:20~13:00)をEnglish Caféとして実施した。

2時限目の英語講座は受講する講義棟のない学生や教職員が活用していた。English Caféも毎回2~6名程度の学生や教職員が参加していた。昼休みの開催は学生が気軽に立ち寄れる利点があり、参加者がいないという状況はみられなかった。しかし、一部の英語をより深く学びたい学生からは、夕方開催時のようなじっくり学べる講座への要望も上がった。

医学部の英語サポートは週1回の限られた時間帯のため、学生にとっては利便性がないという声が聞かれた。より多くの学生が利用しやすく、また英語力向上につながるような工夫を今後も考えていく必要がある。

3) English Café スペシャル:カンボジア Day の開催

日時：11月16日(金) 16:30～

会場：看護学科教育研究棟2階 8203教室

甲府キャンパスからの参加者も含め、14名(内、3名は発表学生)が参加した。

カンボジアに関するクイズ、カンボジアにて統合実習・卒業研究を行った学生による、カンボジアの文化・歴史紹介、などを行った。



図1 学生によるカンボジアの歴史・文化紹介

2. 医学部留学生支援報告

1) 医学部留学生日本語補講Eクラス

分室教員は日本語教師ではないため、日本語の基礎的学習が終了していない段階での受け入れは困難であるとして、本年度からN2以上の日本語能力があることという基準を設定した。そのため前期、後期ともに、希望者はあったが、クラスに参加する日本語能力に達しておらず、クラスは開催されなかった。

2) 統計講座：講師の都合により、今年度は開催されなかった

3. 医学部・留学体験報告会

医学部キャンパスにおいて、分室主催にて留学体験報告会を以下の要領で開催した。

日時：2018年4月27日(金) 16:30～

場所：看護学科教育研究棟 2階 8204講義室

報告者：看護学科学生4名(長期留学2名、短期留学2名)

医学科学生、看護学科学生・教員1名が参加した。実際に本学の留学プログラムを経験した学生からの報告のため、多くの参加者が興味を持って聞いていた。終了後には懇談会を持ち、個別の質問などにも応じた。また、本学の夏季短期留学の情報提供も行った。留学に関心はあるが、必須科目が多い本学部学生にとっては、留学できる学年が限られるためなかなか参加できないなどの悩みも相談された。



図 2-1 学生が作成した周知ポスター



図 2-2 報告会風景

4. 国際交流に関する対外活動: 甲府市国際交流フェスタ(10月14日開催)への参加

2018年2月より、分室教員が JICA 草の根パートナー事業を開始した。このため、今年度は甲府市国際交流フェスタでの JICA ブースにて、活動報告を行うこととなった。山梨大学の JICA プロジェクトを紹介するパネルを展示し、訪問者に説明を行った。また JICA 職員の方々と協力して、ブースに多くの方が立ち寄ってもらえるよう、勧誘などを行った。分室教員のゼミ生(看護学科学生)もボランティアとして参加した。



図 3-1 JICA ブース



図 3-2 ブース訪問者に学生が活動を説明

—国際交流センター医学部分室 宮本和子教授 平成 30 年度年次報告より

IV. 地域貢献

国際交流センターは、キャンパス内だけではなく、地域全体のグローバル化にも貢献したいと考えています。地元教育機関や自治体など、さまざまな団体のイベントや国際交流事業に留学生を派遣することは、地域貢献だけではなく、留学生に異文化交流の機会を与えることにもつながっています。

留学生の地域との交流

留学生にとって地域との交流は、自らの暮らす地域をよく知り親しむことで安心して暮らすことができるだけでなく、卒業後も山梨に留まり定住するという選択肢を広げるきっかけともなります。留学生と地域の方々の交流だけではなく、県や自治体の実施するイベントへの留学生の参加についてご報告します。

(1) 信玄公祭りへの参加：平成30年4月7日（土）

やまなし観光推進機構からの信玄公祭り甲州軍団出陣「三条夫人隊」への参加者募集案内を受けて、毎年、国際部国際企画課にて本学の留学生に参加者を募っています。甲府市中心部を会場に行われる信玄公祭りは例年、武田信玄公の命日（4月12日）の前の金～日曜に盛大に開催され、土曜日の夕方からは、県内各地から1,000名を超える軍勢が舞鶴城公園に集結し、川中島に向け出陣の様子を再現しており、その規模は世界最大級とも言われています。この全国的にも有名な祭りに、戦国武士や侍女等に紛争して参加できるとあって、留学生にとっては大変貴重な日本文化体験となります。

平成30年度は4名の交換留学生が参加し、ベトナムとインドネシアからの留学生が侍女、パキスタンとハンガリーの留学生が警護侍に、それぞれ扮して祭りの行列に参加しました。本格的な衣装を身に着けた留学生たちは貴重な文化体験を喜び、笑顔で行列に参加して甲府の街中を行進しました。

(2) 第20回「たべもの異文化交流会」：平成30年10月17日（水）

医学部キャンパス玉穂国際交流会館において、第20回「たべもの異文化交流会」を開催し、本学留学生や地域の方々など約100名が参加しました。

この交流会は、留学生と地域の交流活動を通じて互いの信頼関係を築くとともに、食を通して異文化への理解を深めることを目的に毎年開催されているものです。

留学生は、ベトナムの「フーティウ」や中国の「小籠包」「緑豆湯」、ネパールの「チキンカレー」などの郷土料理を振る舞い、母国の文化を紹介しました。また、地域ボランティアの方々より、巻きずしやそばいなり、抹茶などの日本料理が振舞われ、参加者は各国の料理を堪能しました。

その後、日本の伝統行事である餅つきと盆踊りが行われ、参加者はひとときの異文化交流を楽しみました。



挨拶する堀哲夫理事(国際交流担当)・副学長



挨拶する田中久雄中央市長



中国料理「小籠包」「緑豆湯」



ネパール料理「チキンカレー」



ベトナム料理「フーティウ」



抹茶を体験する留学生たち

(3) 食の異文化交流事業：平成 30 年 11 月 4 日（日）／平成 31 年 2 月 10 日（日）

この事業は、『山梨県女性のつばさ連絡協議会「こうふ支部会」甲府市国際親交委員会』が毎年 2 回行っており、国際部国際企画課にて参加希望の留学生を募っています。平成 30 年度は、11 月に「ちらし寿司を作ろう」、2 月に「ロシア料理を作ろう」が行われました。ちらし寿司を作る 11 月の回では、本学より 2 名の留学生、ロシア料理を作る 2 月の回では本学より 1 名の留学生が参加しました。

実際に料理を作り、食べながら交流するこの会では、留学生は異文化体験ができるだけでなく、県内の留学生とも交流することができるため、留学生にとってこの会への参加は、地元を身近に感じ、交友を広げるきっかけとなっているようです。

(4) 甲府国際交流会館留学生と地域の皆様との交流会：平成 30 年 11 月 17 日（土）

甲府国際交流会館において、同館で暮らす留学生と岩窪自治会など地域の皆様との 15 回目となる交流会が開催され、甲府市長である樋口雄一氏らを含む約 100 名が参加しました。留学生は母国料理を作り、各国の食文化も合わせて紹介しながら参加者へ振る舞いました。ネパール、パキスタン、マレーシア、中国、ドイツ、英国、フランス、オーストラリア、ベトナム、韓国、タイの 11 カ国から、普段はなかなか味わうことのできない伝統料理 17 品が提供され、親睦が深まりました。

その後、メインイベントである餅つきでは、自治会の皆様による丁寧な指導を受け、芙蓉寮（日本人男子学生寄宿舎）の学生も加わり、「よいしょ、よいしょ」の大きな掛け声の中で、留学生たちが餅つきを体験しました。つくたての餅を堪能した後は、自治会の皆様による獅子舞いの披露や留学生による歌の披露など余興もあり、心温まる一日となりました。



自国の料理を振る舞う留学生



餅つきを体験する留学生



樋口甲府市長よりご挨拶



岩窪自治会による獅子舞いの披露



練習した歌を披露する留学生



参加者全員での記念撮影

(5) 防犯パトロール：平成 30 年 12 月 13 日（木）

甲府警察署より防犯パトロールへの留学生参加募集があり、本年度は、ベトナム、中国の 2 か国から 3 名の留学生が参加しました。これは、甲府警察署、防犯団体、他大学の留学生とともに甲府市内を防犯パトロールするというもので、本学からも毎年、留学生が数名参加しています。当日は寒い中でしたが、留学生たちは午後 7 時頃から、甲府駅・甲府中心街の周辺を、他の参加者と共にパトロールしました。留学生にとって、甲府をよりよく知り、防犯意識を高めると共に、自らの暮らす街に親しみを持つ良い機会となりました。

小・中・高等学校への留学生派遣

山梨県内の小・中・高等学校より留学生の派遣依頼があった際、参加を希望する留学生を募集し派遣しています。派遣の要望は主に、国際交流・異文化交流のための授業や行事であることが多く、地域の教育機関の国際交流活動に貢献すると同時に、留学生の異文化体験や日本の教育機関見学の機会にもなっています。

本学留学生 5 名が南アルプス市立芦安小・中学校のハロウィンパーティーに参加：平成 30 年 10 月 24 日（水）

南アルプス市立芦安小・中学校においてハロウィンパーティーが開催され、本学の留学生が参加しました。

これは、同校主催のグローバル教育企画に本学が協力したもので、当日はガーナ、ベトナム、フランス、ドイツ、タイ出身の留学生 5 名が、同校の小中学生や教職員の方々と、英語を使ったゲームを通して交流を深めました。

パーティーでは児童生徒たちが、世界各地から日本に来ている留学生に対し、母国の文化や日本での生活について、熱心に質問をしていました。

また、児童生徒たちから留学生へ歌のプレゼントが贈られるなど、とても楽しいひと時となりました。



ガーナからの留学生に質問する小中学生



タイの留学生に質問する小中学生



楽しいひと時となりました



参加した留学生

V. 国際交流関連データ

留学生在籍状況をはじめ、国際交流に関連する各種データをまとめて報告いたします。

国際交流センターと国際部の行事(平成30年度)

時期	行事	
4月	3日 外国人留学生向けガイダンス・日本語プレースメントテスト	
	7日 信玄公祭り甲州軍団参加	
	10日 新入生向け国際交流センターガイダンス(学部別)	
	12日 前期グローバル共創学習室(G-フィロス) イングリッシュ・カフェ開始	
	13日 医学部キャンパス「Englishi Café すぺしゃる(カンボジアカフェ)」	
	13・17・25日 平成30年度イースタン・ケンタッキー、グランド・ビュー大学夏季海外研修説明会	
	18日 G-フィロスセミナー「スタートダッシュ TOEIC セミナー」	
	19日 山梨大学留学生を支える会 春のつどい	
	20日 ハンガリー特命全権大使来学	
	21日 医学部キャンパス 英語学習相談、イングリッシュ・カフェ開始	
	22日 TOEIC L&R IP 実施	
	23日 前期 G-フィロス イングリッシュ・サポート開始	
	25日 G-フィロスセミナー「TOEIC スコアアップセミナー」	
	27日 医学部キャンパス「留学経験者による留学報告会」	
	5月	7日 前期 G-フィロス全面オープン (英語・中国語・ドイツ語・ベトナム語・マレー語・日本語のカフェと、日本語学習サポート)
		7日「TOEIC 講座(2 講座)」、「『総合英語』時間外学習/英語基礎復習講座(3 講座)」開始
		10日 G-フィロス イベント「ワールドカルチャーカフェ(中国・ドイツ・ベトナム・マレーシアの食文化紹介)」
		11日 G-フィロス イベント「留学生と英会話！」
		12日 TOEIC L&R IP 実施
		12日 TOEFL ITP 実施
12～13日 新入生合宿研修		
17日 甲府国際交流会館 芙蓉寮との合同消防訓練		
21日 ビジネス英会話レッスンスター(前期)		
22・25日 平成30年度イースタン・ケンタッキー大学、グランド・ビュー大学夏季海外研修説明会		
23日 米国・モーニングサイド大学学長及び学生来学		
31日 アルゼンチン特命全権大使及びコスタリカ全権大使来学		
6月		5日 海外研修プログラム帰国報告会
	7日 防災教室	
	20日 スロベニア・リュブリャナ大学調印式	
	20日 G-フィロスセミナー「留学はじめの一步」	
	23～24日 ホームステイ・ホームビジット	
	30日 よっちゃばれ放談会(甲府市)参加	
	7月	3日 海外インターンシップ マナー講座
4日 G-フィロスセミナー「英語発音ブラッシュアップセミナー」		
9日 スロベニア・リュブリャナ大学学生訪問団来学		
9日 日本語・日本文化短期プログラム開始(ウェルカムパーティー) ～8月3日まで		
11日 G-philos Summer Bash!		

	14日 TOEIC L&R IP 実施
	20日 春季海外研修説明会
	22日 ペルリス大学学生訪問団来学(さくらサイエンスプラン) ～8月11日まで
8月	1～3日 日本語・日本文化短期プログラム学生との合同合宿
	5日 グランド・ビュー大学夏季語学・文化研修+海外インターンシップ派遣 ～9月2日まで
	19日 イースタン・ケンタッキー大学夏季語学・文化研修+海外インターンシップ派遣 ～9月22日まで
	22日 国立台湾科学技術大学 持続可能エネルギー開発センター長来学
	25日～31日 日本留学フェア(タイ バンコク)、コンケン大学、PSUでの大学院進学説明会
9月	15日～20日 ダッカ大学、ジャハンギルナガール大学、クルナ工科大学、クルナ大学(バングラデシュ)での大学院進学説明会
	17日 杭州電子科技大学との修士課程デュアルディグリープログラム開講式
	19日～20日 外国人留学生のための実地見学旅行(長野県)
	21日 外国人留学生向けガイダンス・日本語プレイスメントテスト
	29日 TOEIC S&W IP 実施
10月	2日 後期 G-フィロス イングリッシュ・カフェ開始
	4日 平成30年度春季海外研修説明会
	10日 平成30年度春季海外研修説明会
	10日 G-フィロスセミナー「今の力を知ろう! TOEIC 模試」
	16日 マレーシア人事院総裁一行来学
	17日 たべもの異文化交流会
	22日 G-フィロス全面オープン(英語・諸外国語カフェ・日本語のカフェと日英語学習サポート)
	22日 ビジネス英会話レッスンスター(後期)
	22日 山梨大学留学生を支える会 バザー
	24日 芦安小・中学校グローバル教育「ハロウィンパーティー」に留学生派遣
	25日 防犯講座
	29日 台湾・台北中日経済文化代表処教育部長来学
11月	2日 外国人留学生向け防犯講話
	2日 留学生の華道体験
	7日 G-フィロスセミナー「とっさの一言」
	16日 医学部キャンパス「English Café すぺしゃる(カンボジア Day)」
	17日 甲府国際交流会館 地域のみなさまとの交流会
	26～27日 プリンズ・オブ・ソクラー大学調印式
	26日 交換留学・海外研修プログラム帰国報告会
12月	4日 学長主催留学生懇談会
	8～10日 南開大学学生訪問団来学(さくらサイエンスプラン)
	8日 TOEIC L&R IP 実施
	11日 G-フィロス ホリデーパーティー
1月	7日 日中産学交流推進協議会理事長及び南京市秦淮区委員会書記長一行来学
	8日 G-フィロス New Year World Food Festival
	12日 TOEFL ITP 実施

	22日 G-フィロス イベント「節分」
	22日～25日 瀋陽薬科大学学生訪問団受入れ
	26日 東京下町文化研修
	28日 海外インターンシップ マナー講座
2月	4日 TOEIC L&R スコアアップ対策セミナー
	6日 G-フィロスセミナー「TOEIC L&R スコアアップ対策セミナー」
	7日 ノーザン・アイオワ大学春季語学・文化研修派遣 ～3月24日まで
	9日 TOEIC L&R IP 実施
	10日 レスター大学春季語学・文化研修派遣 ～3月10日まで
	16日 ミャンマー教育省調印式
	24日 ブリティッシュ・コロンビア大学春季語学・文化研修派遣 ～3月24日
	27～28日 フランス・モンペリエ農業科学高等教育国際センター及びボルドー大学学生訪問団来学
3月	7日 外国人留学生等研究発表会
	10日 杭州電子科技大学春季語学・文化研修+海外インターンシップ派遣 ～3月25日まで

平成30年度留学生在籍状況(国別) 基準日:5月1日

No.	国・地域	大学院生	学部生	研究生	特別聴講 学生等	合計
1	中国 China	40	24	11	6	81
2	マレーシア Malaysia	2	30		0	32
3	ベトナム Vietnam	11	5	1	0	17
4	ネパール Nepal	12	0		0	12
5	バングラデシュ Bangladesh	6	0	1	0	7
6	韓国 Korea	5	1		0	6
7	タイ Thailand	3	0		1	4
8	台湾 Taiwan	1	1	1	0	3
9	インドネシア Indonesia	3	0		0	3
10	ドイツ Germany	0	0		2	2
11	フランス France	0	0		2	2
12	オーストラリア Australia	0	0		1	1
13	スリランカ Sri Lanka	1	0		0	1
14	インド India	1	0		0	1
15	イギリス Great Britain	0	0		1	1
16	グアテマラ Guatemala	1	0		0	1
17	ガーナ共和国 Republic of Ghana	0	0	1	0	1
18	ハンガリー Hungary	1	0		0	1
19	スーダン Sudan	1	0		0	1
20	パキスタン Pakistan	1	0		0	1
21	モンゴル Mongolia	0	1		0	1
	計	89	62	15	13	179

受入留学生の推移(過去4年間)

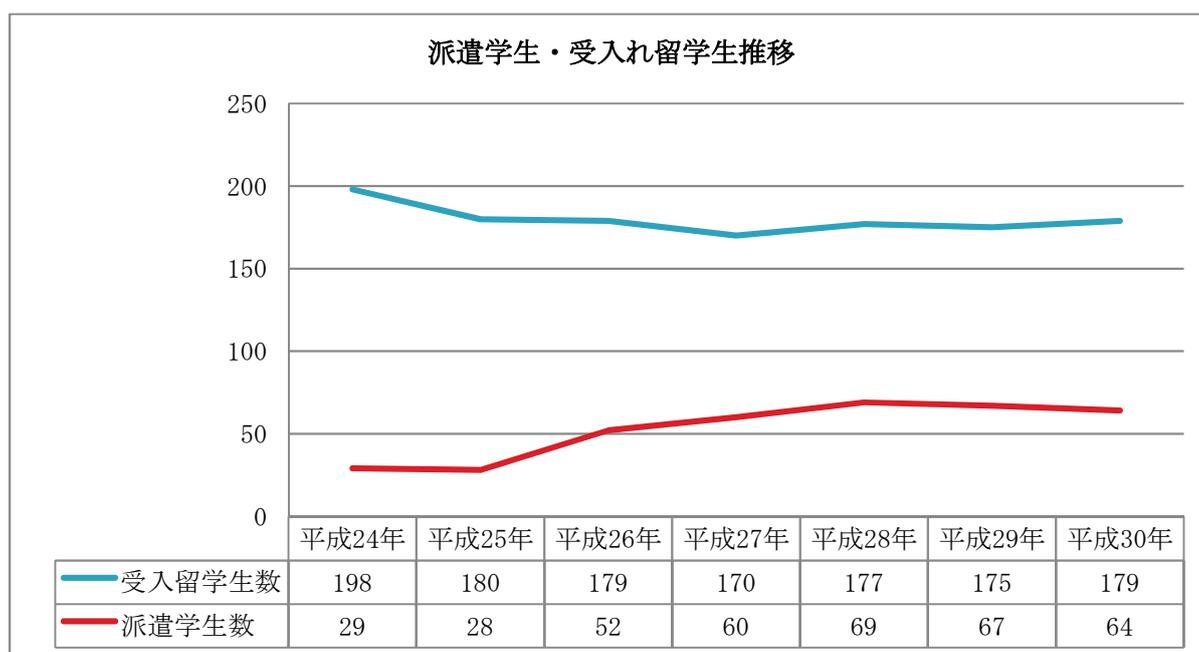
基準日:5月1日

	平成27年度		平成28年度		平成29年度		平成30年度	
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院
国費留学生	0	20	0	17	0	16	0	18
政府派遣留学生	23	1	24	1	26	0	22	0
私費留学生	54	72	55	80	54	79	58	81
合計	179		170		175		179	

派遣留学生の推移(過去4年間)

	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
交換留学	8	3	4	5
夏季・春季海外研修	52	66	63	59
(海外インターンシップ参加者)	(29)	(37)	(36)	(34)
合計	60	69	67	64

<図:派遣学生・受け入れ留学生推移>



派遣プログラム

プログラム名	留学先	実地時期	期間	募集人数	対象学部	備考
英語・文化研修	カナダ University of British Columbia	2019年2月24日(日)~3月24日(日)	4週間	17名	全学	English for Global Citizensの英語講習に参加し、カナダ人家庭でのホームステイを通して英語に親しむ研修プログラムです。
	米国 University of Northern Iowa	2019年2月7日(木)~3月24日(日)	6週間	4名~	全学	ノーザン・アイオワ大学のThe Culture and Intensive English Program (CIEP)にて語学・文化研修に参加します。週末にはアメリカ人家庭にホームステイをします。

	英国 University of Leicester	2019年2月10日(日)～3月10日(日)	4週間	10～15名	全学	英語学習はもちろん、英国文化を学ぶため、現地学生との交流や文化体験学習を行うプログラムです。英国人家庭にホームステイをします。
中国語・中国文化研修 海外インターンシップ	中国 杭州電子科技大学 テルモ杭州工場	2019年3月10日(日)～3月25日(月)	2週間	15名	全学	グローバル人材を目指すための早期キャリア教育も兼ねた研修プログラムです。前半の1週間は中国語学習に加え、現地学生との交流や文化体験を行います。後半の1週間は現地の日系企業でインターンシップを行います。
英語・文化研修 海外インターンシップ	米国 Eastern Kentucky University Toyotetsu America/ Lafayette High School ほか	2018年8月19日(日)～9月22日(土)	5週間	10～15名	全学	グローバル人材を目指すための早期キャリア教育も兼ねた研修プログラムです。4週間の語学研修中、午前中はレッスン、午後はフィールドワークとして現地大学で様々な交流イベントに参加します。語学研修中・研修後の計5日間は現地の企業、または教育機関でインターンシップを行います。
	米国 Grand View University 株式会社ブリヂストンデモイン事業所 ほか	2018年8月5日(日)～9月2日(日)	4週間	10～15名	全学	アイオワ州のグランド・ビュー大学における英語研修と、現地の企業でのインターンシップに参加します。インターンシップでは、現地の企業においてそれぞれの専門に合った業務内容を身近で見学することができます。

奨学金受給者数(私費外国人留学生)

	平成 27 年度		平成 28 年度		平成 29 年度		平成 30 年度	
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院
学習奨励費	5	3	2	5	2	5	3	8
(財)ロータリー米山記念奨学会		3	1	1	1	1	1	2
朝鮮奨学会						1	2	3
(財)共立国際奨学財団				1				
(公財)佐藤陽国際奨学財団	1							
日本国際教育支援協会								
日揮・実吉奨学会	1	1		1		1	1	
大塚敏美育英奨学財団		1						

新規協定締結校(平成 30 年度)

	国名・地域名 Country/Region	大学等名 Institution	締結年月日 Agreement date
大学間	フランス France	ポー大学 THE UNIVERSITE DE PAU ET DES PAYS DE L'ADOUR	2018.6.7
	タイ Thailand	プリンス・オブ・ソングラー大学 PRINCE OF SONGKLA UNIVERSITY	2018.11.27
	ミャンマー Myanmar	ミャンマー 教育省 評価・監督局 MINISTRY OF EDUCATION, DEPARTMENT OF MONITORING AND EVALUATION, MYANMAR	2019.2.16

JSPS 国際交流事業申請状況

	平成 27 年度		平成 28 年度		平成 29 年度		平成 30 年度	
	申請数	採択数	申請数	採択数	申請数	採択数	申請数	採択数
外国人特別研究員(一般)	2	0	3	0	5	0	7	0
外国人特別研究員(欧米短期)	1	0	1	1			1	0
外国人招へい研究者(長期)	1	0	1	0			2	0
外国人招へい研究者(短期)	1	0	1	0	1	0	1	0
外国人招へい研究者(短期) 第二回	2	0	2	1				
研究拠点形成事業 A					1	0		
国際共同研究事業								
二国間交流事業(9月)	2	0	5	1	3	1	6	1
二国間交流事業(2月)	5	1						
論文博士号取得希望者支援	1	0			0	0		

JSPS 研究者養成事業申請状況

	平成 27 年度		平成 28 年度		平成 29 年度		平成 30 年度	
	申請数	採択数	申請数	採択数	申請数	採択数	申請数	採択数
海外特別研究員	1	1	2	1	1	0	1	0
海外特別研究員(RRA)								
若手研究者海外挑戦								

その他国際交流事業申請状況

	平成 27 年度		平成 28 年度		平成 29 年度		平成 30 年度	
	申請数	採択数	申請数	採択数	申請数	採択数	申請数	採択数
さくらサイエンス	1	1	1	1	2	1	2	2
JASSO(短期派遣)	2	1	1		1	1	1	1
JASSO(短期受入)					1		1	0
JASSO(双方向)			1		1		1	0